
真昼の月が見える場所で

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真昼の月が見える場所で

【Nコード】

N4533X

【作者名】

デン助

【あらすじ】

女子校に通う浅葱香月は殺人現場に遭遇する。それは外傷の一切見当たらない不可思議な死因によるもので、通称 眠りの森の魔女 によって起こされる 異能犯罪 というものだった。学校内で魔女とあだ名される人物に出会い、徐々に日常から非日常へと踏み込んでいく香月に宿る異能 心を読み取る力によって、やがて事件の裏に潜む存在に気付き始める。積み重なる人の心の声は、彼女をどこへと導くのか。

第一章 眠りの森の魔女

殺人現場だった。

昼の熱が冷めたビル同士の間、裏路地へ入ると二人分の人影が視界に映る。陽の差さぬ暗がりには横たわる、周囲より一層暗く浮き上がる輪郭と、その傍で佇む影だ。俺は咄嗟に隠れ、気付かれなかった事を確認して一安心する。

反射に近い行動で身を潜めた 壁に背をつけている ものの、しかし次にどうするべきかが思いつかない。余りにも突然で、不意の遭遇に心臓が慌て、思考は浮ついている。

とにかく、深呼吸をした。肌を感じたものから考えていくに殺人にしては静か過ぎる、という事だ。一見した限りでは、被害者が抵抗した形跡も犯人らしき人影が何かした痕跡も見つけられなかった。

だが、意識を集中すると途端にその異常性が眼に留まる。あそこに雪の如く漂う 青い光の粒子群 は神秘的、幻想的でありながらも その実、殺人に何らかの形で関係した疑いがある。

それを裏付けるのは、壁越しに顔を覗かせて見た限り、仰向けに倒れているスーツ姿の成人男性が、確実に息をしていないという事である。生きている感じがしない。それが、これまでに何度も死者を見てきた俺には一目で解った。生者と死者の明確な違いが、例えば遠目であっても解るのだ。恐らく、こんな高校生は他にいないだろう。

危険を知らせるような強い鼓動に、嫌な汗が滲む。悪寒が全身を駆け巡る、夕暮れの裏通り 唾を飲み込んで、息を潜めた。

状況を整理する。

この俺、浅葱^{あひぎ}香月^{かつき}は通っている女子校から帰る途中、いつも通り近道をしようとして、この事態に出くわした。

殺人……それも他殺によるもの、つまりは、事件だ。あの現象、そして静寂の満ちる犯行現場、外傷の一切無い、まるで眠るように殺す不可解な殺害方法。この点から推察するに、計画的犯罪の可能性がある。けれど、それではあの青い光が説明出来ない。そこが警察の調査が陥る落とし穴だ。尤も、こう考える方がおかしいのだが。

あれは超常的な現象が介入したという、マトモな人間なら馬鹿馬鹿しいと笑うようなモノが介入した証左である。非現実的で非論理的ながらも、そういった方法は確かに実在するのだ。

グリーンシス・エフェクト
霊的作用現象である。

あれは現代の魔法だ。有り得ざる現象を引き起こす不可思議。だからこそこの場には、常人には見えない青い光の粒子と、普通なら聴こえない霊子不協和音が余韻のように満ちている

ここで常識を出すなら、あくまで何も知らない一般人ならば警察に連絡するか、何も見なかった事にして逃げるかする所であるが、俺はこうした事例の詳細を知っているだけに、下手な身動きが取れなくなるのだ。

間違いない。これはテレビのニュースで連日取り上げられている眠るように死ぬ怪奇事件、通称 眠りの森の魔女 と呼ばれるものである。

それはいい。

だが、果たして俺は、ここでどう動くべきだろうか？

何も考えず飛び出す愚は控えるべきだろう。ましてや現行犯なら、話し合いが出来る精神状態であるとは考えられない。せめてもう少し情報を得たいと思い、再び覗き込む。

ふと、気付く。周囲に人がいないのだ。ここは閑散とした旧商店街の外れなので、この時間帯でもあまり人を見かける事がない。県が発案したプロジェクトにより新市街区の方へ人が集まり、自然と過疎化していった。歴史を感じさせる鄙ひなびた場所、見捨てられた

旧市街区だった。

雑居ビル同士の間、光の差さない路地にいる犯人らしき人物
その姿は誰も見た事がないらしく、謎に包まれた殺害方法からも警
察が二週間かけて追っているというのに、未だ明らかな人物像も出
回っていない。

ソイツが、居る。

俺が世話になっている探偵事務所の所長が言うには、犯人 魔
女と言われている人物は不可思議な現象を起こすという。しかし現
代において魔女、魔法使いなど到底信じられるものではないだろう。
そういう、不可思議で摩訶不思議、奇妙で奇々怪々な怪事を起こす
もの 街談巷説、道聴塗説、あると信じている方がおかしいと思
われる、それ。

されど事実、怪異はこうして人に害を及ぼし、人知れず社会の影
で暗躍している。また、俺のこの体に宿ってもいる。二度目になる
がこんな高校生、やはり他にいないだろう。つまるところこの犯人
も浅葱香月も、常識の枠フレームから外れている人間なのだ。

現状に集中する。状況に変化はない。普通の実行犯なら目的を果
たした後、すぐに現場を離れるのが鉄則だ。それを守らないとなる
と、死体を隠蔽する方法を探していると見て間違いないだろう。所
作から人物像を伺う事が出来るかも知れない。強く 興味をそそ
られる。こんな状況だというのに、口元が歪む。やはり浅葱香月は
マトモではない。どうしようもなく惹かれるのだ。俺の体に潜む怪
異が、異能という危険を求めているのである。

俺だけが、それを解き明かす事が出来る故に。

壁の向こう、女性の誰すいか何に体が強張った。誰かいるの、というそ
の言葉に応える程愚かではない。ここで疑問が生まれる。これ程正
直に自分の存在を明かす、悪く言うなら浅慮に問い掛けてくるなど、
凡そ噂通りとは思えない行動だ。

聞く限りでは、正体不明の殺人鬼。だがこれでは自分の情報を垂れ流しているようなもの。ならば噂は所詮噂だけのものだったのか。それとも別の理由があるのか。

足音が近付く。音質は軽い。走ってくるのが解る。俺は壁から距離を取り、数歩下がった。周囲にはやはり人が見当たらない。

何故こうまで人がいないのか。幾ら旧商店街と言っても、あまりに誰もいなさ過ぎるのではないか。不気味で、寂々としたゴーストタウン。まるで異界だ。

静か過ぎて 耳鳴りがする程に。

裏路地から現れる、上から下まで真っ黒な服を着た成人女性はウエーブがかった長い黒髪を腰よりも伸ばしており、俯きがちで顔がよく見えなかった。不気味、という第一印象を抱くと、それを裏付けるかのようにダウナーな声音が響く。

「女学生……人払いの術式はまだ機能しているのに、何故」

女は、右手の親指を噛んだ。鬱々と、平坦な声音が続く。

「失敗？ 私は失敗した？ いや、まだ大丈夫。どうして突破されただか解らないけどまだ修正が効く。洗礼は済んだ。消せばいい。目撃者は全員殺す。そうするしかない」

聞いているだけで気が滅入るような調子だった。一人言のようで自己完結している内容の為、割り込むのに勇気がある。こういう手合いは、自分の世界を壊されると何をするか解らない。

俺は言葉を投げかける。冷静に、或いは泰然自若と。だがこれが失敗だった。

「お前があの人を殺したのか？ 現行犯なら警察じゃなくても逮捕出来るぞ。大人しく縛につけ」

恨めしげな目線が、それまで隠れていた前髪の下から送られてくる。

淀んだ瞳に潜む、黒い感情に怖気が走った。怒りや恨み、憎しみが垣間見え、正気と狂気が混在しているようにも感じさせる。攻撃

的な意志を感じ、迂闊に動けなかった。

何をしてくるか解らない。ザワザワと女の髪が靡く。睨みつけてくる眼はマトモな人間のものとは思えず、肌が粟立ち、得体の知れなさにゾクリと寒気が全身を駆け巡った。

変転し、張り詰め、静から動に変わる際のキナ臭い感覚が立ち込めていく。

俺は、致命的なミスを犯した気がする。

次の瞬間、俺を睨みつけるそれが驚愕に見開かれた。

そして、サツと踵を返して駆け出す。ワンテンポ遅れて気付いた。逃げるつもりなのだ。態度の豹変に呆気に取られる。間の抜けた声があがる。魔法の考えが読めず、思考は揺れるばかりだった。

追いかけてよとする　と、突然肩を捕まれ、その場に留められる。

「待て」

背後を見る。がっしりした手はその身じろぎにも離れない。成人男性だった。見たところ二〇歳そこそこだろう。巨漢ではないが、体つきはしっかりしている。

「は、離せ！　何だアンタは、あの魔法の仲間か！？」

太い声が発せられた。

「魔法？　そこに誰かいたのか？　いや、それよりも」

鋭い眼が俺を射抜く。襟首にかからない程度で切られた黒髪からして純粋な日本人のようだが、雰囲気がそこらの一般人とは違っていた。言うなれば刃物のような。緊迫した空気を纏った、黒いトレンチコートの男である。

「お前からは、あの女の臭いがする。詳しく話を聞かせてもらおうぞ。異質な空気を纏っていた。俺とは似て非なる。そう、鋭い牙を持っているながらも社会に溶け込んでいるような　隙の無い、場違いな佇まい。」

見れば、魔法の姿はもう認める事が出来なくなっていた。口惜し

さに歯を食いしばるものの、すぐに思いなおす。

……もしかしたら、今はこれで良かったのかも知れない。さつきは少なくとも良い流れではなかった。純粹な敵意が向けられていた。襲われる可能性が高かっただろう。あのまま俺まで殺されてはどうしようもなかったのだ。運が良かったと思う事にする。

ひとまず、男の話である。人相から堂々とした大人の姿勢が窺える。視界に魔女が映っていれば混乱や動揺が少しはある筈だが……それも含め、話してみたいと思った。

「解った、とにかく離せ。警察に連絡しなくちゃならない。すぐそこで人が死んでいるんだ。アンタ、あの魔女が逃げていくところを見ていなかったのか？」

男は首を傾げる。頭一つ分は高い所から見下ろされると威圧感があるものだが、その動作にはどこかあどけなさが覗く。

「逃げていくところ？ いや、何も」

ウソをついている様子ではない。タイミングからして視界に入らない筈が無いのだが……やはりそういった効果を持つ不可思議が働いていたのだろう。魔女の言では人払いの術式という事だが、定かではない。

つまり、俺だけが視えていた。

だが、それなら何故あの魔女は突然逃げ出したのか？

重なる謎に、俺は入り組んだ迷路へと迷い込む錯覚を覚えた。

警察署で日付が変わるまで拘束され、事情聴取から解放された深夜である。俺の身元を引き受けてくれている。実の両親は十年以上前に死去している。愛染探偵事務所の所長と落ち合った。俺は待合室にいた彼へと片手をあげる。

「悪い所長、今までかかった。やっぱり魔女の人相が解った事は大きいらしいな」

ボサボサの髪を適当に撫で付けたその男性。眼鏡をかけた長身ちようしの、それこそ押せば倒れるような中年は俺の言葉に答えつつ、

携帯灰皿に煙草を捨てる。

「や、そりゃそうでしょ。今まで何も解らなかつた謎の殺人鬼だからねえ。その最初の目撃者がカツちゃんっていうのも、何かの因果かな？」

俺の体に眠る怪異について言っているのだ。使いどころが難しい力で、多用も出来ない上にリスクもある。

「かいしき解式の事？ でも、あまりおおっぴらに自慢出来るものじゃないし、これのおかげで棺桶に片足突っ込んでるのに。因果と言うよりは、皮肉じゃないかな」

茶色のスーツをだらしなく着た所長の横を通り過ぎ、外に向かう。「でも、君のおかげで助かる人がいる。それは良い事じゃないかい？」

「おかげで俺に良い事なんか一つも起きない。まあ、それでこの仕事嫌になる訳じゃないけど」

彼は、俺が異常だと知っている数少ない一人だ。父親 というよりは、兄に近い。

「無理しちゃいけないよ。君は優しい子だから、誰かを守る為なら自分から危険に飛び込んでいっちゃう。僕としては心配だよ」

「俺が優しいなんて、酷い勘違いだ」

ただ、異能であるサイコメトリーを正しく使う状況が、こんな場所にしかなかったというだけである。悪を暴く探偵というと聞こえは良いが、その実は只の、居場所がない社会不適合者だった。

羊の群れに狼が皮を被って混じっている光景を想像し、自己嫌悪に陥る。周囲に溶け込めず、勝手に一人で心の壁を作って自己防衛をしている そんな自己分析を、振り払う。

どうあがいても俺は異質だ。けれどその異質さが、羊達を襲う怪異を退ける剣になるという事を知っている。怪異には怪異でしか対処出来ない。

だから俺は、自分が異質である事を曲げてはいけないのだ。だって、戦えなくなる。

普通というものに憧れはしても、怪異を斬る剣がイザという時
び付いていては意味が無いのだから。

「ああ、待つてよカツちゃん」

「カツちゃん言うな」

考えを中断するように足を速めて、言った。親代わりの人間に
対してこのぞんざいな態度は正直、褒められたものではないの
だろうが……今更変えるのも照れが先立って難しい。

所長が頼りない風体というのもあって、どうにもきつく当た
ってしまう。無論、恩義は感じているのだが、性分であろう。

警察署から出ると、いの一番 夕方に俺を引き止めた黒いト
レ ンチコートの男が正面に立った。今まで待つていたらしい。

「済んだのか？」

またも見上げる程の身長差から睨まれて 浅葱香月は女学校
でも長身な方で百六十センチある 負けじと男勝りな口を聞く俺は、
女らしくないと驚かれる事が多い。

この男はそれが無い。今のところ一つだけ確かなのは、年下に
夕メ口をきかれても怒らないという事だ。それよりも情報が欲しいと
割り切っているのかも知れない、仕事か、自分の目的に忠実……そ
ういう面が窺える。見上げた男だ、と心中で認めた。

「ああ、待たせたな。それで、話はどこです？ 正直、秋の寒空
に外で立ち話というのは避けたいんだが」

すると、無愛想な態度とは裏腹に気がつく性格なのか、街中の光
る看板を指差した。

「解っている。あそこのファミレスが良いだろう。異論は？」

所長が慌てた。

「ちょ、ちよつとカツちゃん、この人は？ いつも言ってるよね、
夜遊びはいけないって、まだ君は子供なんだから！」

聞き飽きた小言に辟易して、腰に手を当てる。

「子供扱いするなって、夜遊びなんかしないよ。もう一人前なんだ

から。あと、カツちゃん言うな！」

幼少の頃から続く愛称なのだが、いい加減恥ずかしい。こうして幾度も抗議の声をあげているのだが、慣れ親しんだ慣習というものは簡単に変えられないようで、ついつい口が勝手に言ってしまう、とは所長の言い分。

そこでふと男を見る。

「俺は浅葱香月。香月でいい。こっちは愛染幸助^{あいぜん・こうすけ}。どちらも愛染探偵事務所の者だ。アンタは？」

口籠^{くちも}る様子に、先程までの堂々とした様子は見られない。

「どうした？ 何か言いにくい事でも？」

いや、と答えて。

「俺は……伊庭。伊庭和泉守玄之丞吉兼だ」

思わず聞き返す。何かとてつもなく長い名前のようで、聞き取れなかったのだ。所長と上擦った声が重なった事は、無理もあるまい。

「いば・いずみのかみ・げんのじょう・よしかね」

男は区切り区切りに、解りやすく発音してくれた。二度目の名乗りに慣れているような 恐らくそういった苦労がこれまでに何度もあったであろう事を伺わせる態度だった。

昔の基準であれば伊庭は姓、和泉守と玄之丞は役職で、吉兼が名との談である。味があつて良い、と一応は擁護したものの、やはり、長い。ちなみに現在では役職名は形骸化し通称となっているようである。

ともかく目的の地へと向かう。移動先のファミレス、テーブル席にて腰を落着けた所長はハツと何かに気付き、瞠目して身を乗り出す。

「伊庭！？ 伊庭つてもしかして、御三家^{ごさんけ}の伊庭！？」

横で大きな声を出された俺は耳を塞いだ。

「音量下げてください、所長……何、その御三家の伊庭つて」

「あ、ああ、ごめんよカツちゃん。ええと、御三家から説明しよう

か

それは、ある分野について最も高名な三者を差して言う言葉らしい。そして伊庭は、大昔から陰陽術や風水などに関連した、どちらかと言えば表沙汰に取り上げられない裏社会での御三家に数えられているとの話だった。

通称、陰の御三家。

「まさかビッグ・スリー縁ゆかりの人物に出会えるとは、しかもこんな街で」

唐突に、伊庭が遮る。

「家は関係ない。もういいだろ、止めてくれ」

少し意外だった。立派な家柄だというのに、彼は家の事に触れられたくないのだろう。先に口籠ったのはこれが原因かも知れない。

「所長、謝って。すまなかつたな、伊庭。こちらに悪気はない。話を進めよう。」

お前は、あの女を知っているのか？」

しかし、続く伊庭の言葉に俺は首を傾げる事になる。

「それは どちら の事だ？」

話が、噛み合わない。

「どっち、とは？ 魔女は二人いるのか？」

しかし、伊庭の答えは。

「いや、魔女は一人だけだ」

腕を組む。どういう事だろう。混乱させようとしている、とは思えないが……そうしているとウェイトレスが伊庭にお冷、俺にメロソードを運んできたので口を付けた。所長が煙草を吸おうとするのを横からかつさらい、握り潰す。禁煙席である。

「……そうか。つまり、魔女ではない何者か……関係者がもう一人いる、という事か？」

「う……む……」

歯切れが悪い。

「そうかも知れないし、そうでないかも知れない。

逆に俺からも聞く。夕暮れ時のお前からは、俺が知っている術式の残滓を感じた。あれはどういう事だ。お前こそ、あの女を知っているんじゃないのか？」

「あの女とは、誰の事だ？」

魔女か、とも思ったが、彼はその姿を見ていないと言う。明らかに見える位置だったというのにだ。少し躊躇った後、伊庭は答えた。

「今は異能犯罪者としての烙印を押され、各機関から追われている

……長いウェーブの髪に、」

俺は思わず立ち上がった。

「やはりアイツか！」

すぐに迂闊だったと気付き、手遅れだというのに口を押さえて静かに座る。周囲の視線が痛く、顔が熱くなる。

所長に言った、もう一人前という言葉が恥ずかしい。

「……どうい関係だ？　ちなみに俺はたまたまあの場に居合わせただけで、偶然出くわしたんだが」

俺から視線を外した伊庭は、静かに答える。

「……婚約者だ」

この時、俺と所長はハニワのような顔をしていたと思う。見れば左手の薬指に指輪が嵌められていた。

「なんとしても連れて帰りたい。今は、それしか言えない」

気を取り直して、頭を働かせる。

しかし、それなら解る。あの魔女は伊庭の姿を見て逃げ出したという事だ。そうなると何故逃げ出したか、という理由が必要になってくるが……続きを聞く限り、それは魔女本人に聞かなければ解らないようだった。

「だが、異能犯罪者となるともう市井に戻るのには絶望的だ。素直に罰を受けさせるべきでは？」

何しろ専門の機関は警察よりも強い権力を持っている。それこそ

伊庭を初めとした裏御三家を凌駕するだろう。

俺の言葉に、伊庭は臍腑から出したような低い声で答える。

「……事情があるんだ」

本当にこの男は婚約者を連れ帰る為だけに、この街に訪れたのだろうか。そんな勘繰りをさせる程、肩に重いものを背負っているように見えた。

閑話休題。異能犯罪についてである。

いつ聞いても、この言葉を聞くと好奇心と知的欲求が湧き上がる。言葉が持つ魔的な魅力に、俺はすっかり虜だった。

通常の警察機構では対処出来ない、超常現象や霊的な作用現象が人為的な意図性を持って関与したと思われる犯罪行為は、異能犯罪と区分されて専門機関に委ねられる。

混乱が起きる為、決して明るみに出してはいけない案件だ。よつて、グレーゾーンの探偵がそれを優先的に調査し、専門機関に協力する体制を取っている。

言うなれば尖兵。または斥候。或いは……捨て駒。

危険度は高く、保身を思うなら手を出すべきではない。身に及ぶ危険が凶悪殺人事件の比ではないのだ。事実、この所長も当初はそう言っ手をつけなかった。

キツカケは、俺。

何を隠そう、俺は異能や術式に関して専門家である。プロフェッショナル

「お前、異能犯罪について知っているのか？ 一般人のくせに」

一般人という言葉に、思わず嘲笑を浮かべてしまう。

術式というのは願いを形にするものだ。人の心が放つ心界言語テトラ・コードによって周囲の霊子マナに働きかけ、現実グノーシス・エラエクトに霊的作用現象を引き起こす神秘である。

これが悪用される事例も多く、先も言ったがそうしたものは異能犯罪と区別されて専門機関が事の処理に当たっている。

ブレザーの胸ポケットから取り出した探偵手帳を相手に見えるよ

う翳す。

「愛染探偵事務所を覚えておいてくれ。俺は異能犯罪を解き明かす事の出来る技能を持つている。何かあれば、連絡をくれ」

割合スンナリと伊庭は頷き、コートのポケットからソレを取り出す。

「なら、俺からもこれを」

名刺だった。長ったらしい名前の横に書いてある漢字の並びに、眼が惹かれる。

「……我謝御霊会？」

それは、異能犯罪を専門的に裁く権利を持った、巨大な組織の名だった。

探偵なのか、それとも別の何かなのか。

素性の知れない伊庭を信じていいものか、この時の俺は解らなかった。

* * *

翌日、女子高へ登校する道中で、皆が遠巻きに俺を見ていた。特に昨日今日始まった光景ではなく、入学当初からこうした様子は時々見られたが、最近顕著である為、流石に気になってきたのだ。

やはり、探偵というのが興味を惹くのだろう。時に生傷を作ってくる辺り、自業自得なのだろうけれど。流石にまだ殺人事件の第一発見者だとは広まっていまい。所長も未成年だとして伏せるよう警察にお願いしていたし。

しかし、俺がどんな状態でも変わらず声をかけて来る物好きもいたもので、それは教室に入っすぐの事だった。

肩より長い金髪をツーサイドアップにした、碧眼の美少女である。高飛車で常に取り巻きが最低二人はいる、神崎零子^{かんさき・れいこ}だった。同性の俺から見てもアイドルか女優のようで、実際に街でテレビ出演の声

もかけられたという美貌の持ち主である。

俺はお嬢と呼んでいる。

「ああら、浅葱さん。御機嫌よう。今日はいつもより五分程早いのではないくて？ アナタのようなアブない人が五分前行動だなんて、槍でも降る前兆かしら？」

挑発的に突つかかってくるのはいつもの事だ。眼の上に手を翳して、窓の外を見やる仕草をされると、少し腹が立った。

「別に、いつも通りだけど」

「本当にそうかしら？」

席に座りながら言うと、ずい、と顔を近づけてきた。柑橘系の香水をつけているのか、匂いが届いてくる。

「た、例えば、体調が優れないから早めに家を出てきた、とか。それで教室でちよつとでも休もうとか」

真剣な目つきと口調に気後れした。

「え？ いや、別にそんな事はないが」

お嬢はサツと身を離して胸を張る。顔には先程と同じ高飛車な笑みがあったが、どこか安堵しているようにも見えた。

「あらそうですの！ 心配して損しましたわ！ 全く浅葱さんにも困ったものです、まあせめて学級委員長であるこの私に迷惑をかけるまいよう、精々うまく立ち回って、」

「……心配してくれたのか？」

そんなワケがない と思っていると、ぐつと言葉を詰まらせたお嬢が、次第に顔を赤くしていった。小さく身を震わせている。

「別に、アナタの事など心配しておりませんわ！」

やはり彼女の心は読めない。今のように会話がスルスル流れていったかと思うと、こうして突然、訳も解らぬうちに怒らせてしまう事が多いのだ。

ちくはぐなやり取り。アンバランスな齟齬の疎通。

心の距離が、測れない。

昨夜のように大人達に混じっている間は、探偵という仮面がある

からまだ良かった。けれど今は普通の生徒を装わなければならない。こつこつ時に被る、普通という仮面が俺にはつらい。

異常者の癖に正常者へと擬態し、普通を装って日常に混じる。そんなグロテスクな毎日を送る浅葱香月は、この水槽の中で目立たないよう、ひっそりと息を殺し続けている。

「ただちよつと口が滑っただけです、勘違いしないで下さらない！？」

威勢良く指を指してくるのは様になっていて結構だが、俺はどこで彼女の気に障る事を言ったのだろうか。会話を続ける氣勢が削がれ、肩をすくめた。

「……そうか。もう少し話をしようと思ったけど、止めておく」
話せるのはお嬢くらいのものだったんだが、と零す。

さりとて、俺とお嬢は友達ではない。彼女が勝手に突っかかってきているだけだ。けれどそれに救われている部分も確かに存在する以上、俺はお嬢に感謝しなければならぬのだろう。

そんなみつももない情性で続けられる、普通という皮を被った擬態だった。

勝気で活発、高飛車で高慢。それでいて正義と熱血を心に宿す、熱いというよりは暑苦しい少女を見上げる。

いつかは彼女も俺から離れていくだろう。普通である彼女が、浅葱香月の異常性を目の当たりにして、それでも傍にいてくれるワケがないのだから。

ただ、もう少しだけ。もう少しの間だけ、友達のように

「ん、んん！ コホン。そこまで言うならこの学級委員長にして学年成績トップクラスの私が、浅葱さんの相談を受けなくもありませんわよ！」

「……相談じゃないが。まあ、その、ありがとう。と言っても変なものじゃない。昨日変な男と知り合っつてな。ソイツの探している、」
「お、男！？ 浅葱さんに男性の影が！？」

やおらガタガタ言い出す教室内。視線が集まる。何故ここまで注

目されるのか。思い返すに男性と付き合っている同級生は多い筈である。近くの高校は共学なので、その生徒と　というケースが大半だが、社会人の場合も聞く。滅多に無いが、酷い場合では援助交際の噂も囁かれる。格式高い女子高とは言え、恋に恋する乙女ばかりではないのだ。教師の眼を潜り抜けて夜遊びする輩が後を絶たない。

なので、男と街で知り合った程度、正直驚く事もない世間話の筈なのだが　嫌われ者はそういった方向でも注目されるのだろうか。居心地が悪い話である。

だが、これはどうにもそれだけではないように思う。妙に色めき立った声も上がるのはどうしてだろうか。

こうして腫れ物扱いされる水槽の中で、俺はこの先もうまく息を殺し続ける事が出来るのか、不安になった。

「フ、フフ……」

傍らからの不気味な笑い声に顔を向けると、お嬢が俯いて立ち尽くしていた。俺は座っている手前、顔を覗き込む事は出来るのだが、漂う黒い空気に躊躇われた。

「どうした、お嬢」

艶やかな唇から零れる、鬱屈した声。

「そうですか、いつかは、と思っていました。がこれ程早くとは……フフフ……」

すると、普段キビキビした動作の彼女からは想像がつかない、幽鬼のような足取りで席へと戻っていった。口から呪詛のように吐き出される言葉は、周囲の雑音に紛れて聞き取る事が難しい。

「牽制、牽制しないと……そうですわ、お昼……お昼にお弁当をダシに誘い出しましょう。あの方、子供味覚だから今から好みに合うのを作らせて……」

お嬢の様子に呆気に取られた俺は、暫し呆然としていた。あれは一体どうした事だろうか。嫌味の一つでも飛んでくるかと思ったの

だが。そうしていると担任が現れ、何事もなく一時間目の授業が始まった。

第二章 森に潜む狩人

神崎零子 かんざき・れいこ

彼女とは剣道で知り合った仲である。中学時代から剣道小町と称えられていた彼女を、女子高入りたての練習試合でやり込めた事からよく因縁をつけられるようになり、当時は険悪な仲だった。それが軽い調子で会話に冗談を交えられるようになったのは、最近になっての事である。

向こうにどう見られているかはともかく、俺はお嬢を素晴らしい人物だと思っている。実直で努力家、勉強、運動どちらも学年トップクラスを維持している才色兼備という才媛。県内でも高いレベルであるこの女子高にてその成績を保ち続けるのは並の努力では難しい。それは同じ場所にいる俺が一番良く知っている。

彼女を例えるなら、白鳥であろう。人知れず努力を重ね、しつかりと結果を出す。常に周囲の期待に答え続け、それに比例して皆に寄せられる信頼が、俺にはとても羨ましく、眩しく見える。

しかし一歩引いた視点から見ていると、彼女の欠点も浮き彫りになってくる。一度視点が固定されると、それしか見えなくなるのだ。視野狭窄を起こしてしまいがちな事に、一体どれだけの生徒が気付いているだろう。

果たして今回、それが原因となった。

*

*

*

天気が良いとの事で、屋上に連れ出された。季節は秋に入りかけた九月の終わりである。紅葉し始めた街路樹の並ぶ新市街地を眼下にベンチに座る俺とお嬢、その他数人とで過ごす昼休みは、なかなか貴重な体験だった。

というのも昼休みになった途端、摂ろうとしていた昼食を横から奪われた事に起因する。

その張本人であるお嬢は何故か人一倍いきいきとしていて、膝に乗せていた重箱を自慢げに見せてくる。咳払いを一つすると。

「これは神崎お抱えのシェフが作ったお弁当ですわ。最高級の素材を使って調理された、それこそ中身は一流レストランで出されてもおかしくないレベルですの。これを貴女のような貧乏人が食べられる事に感謝して欲しいですわね」

「いや、別に頼んだ訳では」

「でもまあ今回は！ 特別に！ この私の好意で食べさせてあげますわ！ 本来なら神崎以外は口に出来ない高級料理を味わえるのも私のおかげという事をお忘れなく」

今日は舌の滑りが普段より二割増しくらいになっているようだ。やかましい程である。

「いや、だから俺は頼んで、」

「気後れなさるのも無理はありません、貴女のような少々見た目が優れている程度でこの私、学校に多額の寄付をしている神崎財閥の令嬢に眼をかけられているなんて、もはや奇蹟と言っても過言ではないのですからね　ま、まあ美点がそこしかないという訳ではありませんけど」

自分を持ち上げまくっているのは別に良いのだが、やっぱり俺は弁当を食べたいと頼んだ訳ではないのである。この流れから考えるに、お嬢は俺にどうしても一緒に食べてもらいたいようだった。

「別に見た目は普通だと思いが。俺くらいの奴、そこら中にいるだろ」

そこでお嬢は呆れたように首を振った。溜息もついている。素の調子に戻った声音で。

「……気付いておりませんのね」

意味が掴めず、俺は首を傾げるばかりだった。

「ところで浅葱さん、昨日お知り合いになったという男性とは、どこまで？」

興味津々といった様子で詰め寄られ、少し身を引かせた。

「どこまでつて何だ、お嬢。携帯の番号を交換しただけだけど、その位は普通するだろ？ お前だって男友達いるだろうに」

正直、伊庭が俺の男友達であるかという否であるのだが。

お嬢の弁当箱 三段重ねの重箱 に手をつける。美味い。色とりどりの食材が主張し過ぎず、互いに引き立てている様は圧巻の一言に尽きた。しかし隅の方に鎮座するアスパラガスは苦手なので手付かずである。

「え、ええ、それはもう沢山ありますけれどね！ 未だ誰にも心を許してはおりませんし、そう簡単に許すつもりもありませんわ！ 私の恋人となる人は、私よりも気高くなくては！」

難儀な女である。お嬢の天に届かんばかりのプライドを超えるヤツが果たして人類に存在するだろうか。破滅へと突き進むその根性は認めるが、あまり褒められたものではないだろう。

「そっぴや剣道部の方はどうだ？ 最近顔を出してないけど、皆来てる？」

「それはもう。皆さん一生懸命ですわよ。精神鍛錬の場としても体を鍛える場としても人気の部ですし、それに剣は日本人の心ですからね。自分を見つめなおす良い機会になっているようですわ。皆さんの士気も高いですし。今度の大会では必ずや優秀な成績を修める事でしょう！ そうなれば次期主将としても鼻が高いですわ！ 薙刀部なんかには負けませんわよ！」

立って高笑いし始めるお嬢を無視しつつ 話を振ったのは俺だがそれはそれとして 彼女の取り巻きに話しかける。

「コイツについて疲れない？」

「し、失礼ですわよ浅葱さん！ しかも、我が気高き剣道部が誇る正義の志をこれから語って聞かせようかという時に！」

「お前は本当にそういうのが好きだな」

ああ見えて正義と熱血が信条、暑苦しい性格なのがお嬢という人間である。これが原因かは知らないが、取り巻きはお嬢の神崎とい

う家の名前に縋っているだけで彼女本人とは少し心の距離があるように思う。お嬢が俺を放っておかないのは、そういう部分　心に壁を作っているところが自分と似ているからかも知れない。

正義や熱血というお題目があれば、本音を言わずとも動機にはなり得るからだろう。或いはそうした自己弁護、自己欺瞞、自己防衛なのか　とにかく、熱血、正義と来たら最後に友情を並べて三拍子揃えば完璧なのだが、彼女と同じく友達がいない俺の言えた義理ではなかった。

お嬢の発奮が治まったようで、隣に戻ってきた。居心地が悪そうにしている。

少し頭を冷やしたかった事もあり、間を置いてから切り出した。

「ところでさ、ちょっと前に起きたアレ、親が神崎の関係者だって話を聞いたんだが、本当か？」

彼女は身を硬くした。

「え、ええ……そうらしいですね。私は昨日まで存じませんでしたけれど」

「同じ学校の生徒なのに？　ああ、親の差し金か。財閥のトップ、お前の祖父だったな。孫の身を案じているなら護衛の一人や二人つけるもんじゃないか？」

「実際にいますわ、今だって監視されています。まるで学校が檻になったようで、息が詰まりますわ」

今から一ヶ月程前に、この学校で自殺騒ぎがあった。死亡したのは一年生の、明るく活発な生徒だったという。勉強、友人関係、部活動など洗えるところは全て洗ったが、彼女がどうして自殺に及んだのか、結局は解らずじまいだったのだ。

そう　サイコメトリーを持つ俺が検死に立ち会う直前に、その遺体はいずこかへと消えたのである。

「一応は、その前に起きた父親の事が原因とされていますが、本当のところは」

お嬢が首を振る。その子の父は件の　眠りの森の魔女　によって

殺された。ちなみに俺のサイコメトリーは死者とも会話が出る面を持つ為、死亡後も事情聴取が可能である。魂への接触はしかし、大きな危険と負担を強いられる。下手をすれば俺自身が死者に引き摺られてしまう可能性があるのだが……それはまた別の話。

この事もあり、先日的事件で魔女と遭遇した時も被害者が殺されている事をすぐに看破出来たのだが……被害者が自身に何が起こったのかを理解していなかったので、解明出来なかったのが悔やまれる。

自殺した生徒の話に戻る。

「父を失った悲しみで世を憐んだ……テレビや新聞ではそう公表されたな」

だが、それは違うというのが彼女の母親の言だった。少なくとも証言の限りでは、一緒に頑張って生きていこうと強く誓い合ったらしい。彼女の遺留品からもそれを解明した俺は、確信するのである。彼女は自殺によって死亡したのではない。何者かによって殺されたのだ。他殺、つまりは事件。遺書も遺さず自殺なんてしない

しかし、今更それが警察によって詳しく調査される事はない。事は何故か 内々《ないない》のうちに処理されていたからだ。もしかすると警察の内部にまで、犯人の手が及んでいるのかも知れない。「お嬢、何でもいい、最近何か変わった話はないか？ 変な噂とか、どんな小さな事でもいいんだ」

「え、ええ？ そう言われましても」

何よりもこの話をした大きな原因としては、伊庭が話したあの言葉が頭の隅に引っ掛かっているからだだった。

それは どちら の事だ？

魔女と、魔女ではない何者かがもう一人いる。それが俺を焦らせる。けれどどんな小さな事件でも、見過ごしていい事にはならない。二兎を追うものは一兎も追えず。今は少しずつでも眼の前の事件を解決していかなくては、と自分に言い聞かせた。

お呪いましなが流行っているという。

少々肩透かしだったが、聞けば聞く程引つ掛かるものを感じたので調査する事にした。確かに女性は噂や占い、呪いというものに強い興味を抱きやすい。しかしながら流行り廃りの激しいジャンルでもあるので、特に興味のない俺は今まで対岸の出来事に感じていた。だが、お約束事のようなものは時代が流れても不動の法則の如く生き残るようだ。由緒正しい女学校は、長い歴史を誇る故にその実績も維持されるものであり、また、同様に人の心を強く揺り動かす怪談というものが脈々と受け継がれてきていた。

深夜の教会に現れるシルクハットの主は、願いを叶える不思議な力を持っている。

これには腑に落ちないものがある。願いが叶うという安易な言葉に縋る輩が必ず出てくるのに、しかし教師連中が、シルクハットの主を不審人物と意識して注意を呼びかけている訳ではないという事だ。あまりにも甘い話に誘惑され、願いが叶うというそれを悪用する者がいてもおかしくはないというのに。しかし俺が今までこの話を知らなかった点、そこまで大きな噂になっている訳ではないようである。こういう手合いの話はやはり、裏を疑うべきであろう。

言ってしまうえば、人に良いように働く怪談というのは珍しくない。座敷童おしきわらわしが筆頭にあげられるが、しかしそういった場合はもつと大々的に話され、それこそ誰でも知っている位に広まっているものではないのか。

この話が学外に広まる事なく噂され、誰でも出来る呪いとして認知されている理由があるのでは、と。俺はそう疑ったのである。その直感のらは正解だった。まじないとは呪いと書く。人を呪う、呪詛にも為り得る概念を内包したもの。それが畏であったと判明するのは、もう少し後の話になる。

* * *

女学校の制服は紺のブレザーとスカートに、指定のタイツと革靴だ。俺はちよつと違反してガーターを着けているが、これは何も背伸びしての事ではない。

スカート下に武器を隠せるのだ。女にしか出来ない携帯方法であり、流石に持ち物検査でもスカートを捲り上げるような調べ方はしない為である。アクションやスパイ映画でも良く見る手法だ。着替えの時は少々苦労するが。

左と右の太腿外側に、片刃ナイフを仕込んでいる。背に鋸刃セレーションも備えた刃渡り十五センチのコンバット・ナイフとなっている。これは二つの背を合わせて合着させ、刀身中央にスリットの入った大型の刀剣ソードブレイカー砕きとしても使用出来るのだ。

正式名称は、罪斬つみぎりの陰と陽 とされている。

量産モデルではなく、名のある刀工による霊的な作法で打たれたワンオフモデルで、異能犯罪に携わる俺へと与えられた、神秘を断つ為の媒体である。

浅葱香月の探偵七つ道具が一であるが、こうして考えるとどうにも物騒な探偵であつた。

閑話休題。

噂の真相を調べようと思ひ、放課後に校内を巡回していると、近くの教室から女生徒の怒鳴り声が聞こえてきた。何やら複数人で一人を攻撃している様子だ。

近付くと、聞くに堪えない言葉が耳に届いてきた。ムカつく、気持ち悪い、魔女の癖に そんな調子で攻撃いやさ口撃が続いている。足が向く。そう、俺の興味を惹いたのは魔女という単語だ。まさかとは思うが眠りの森の、ではあるまい。しかしながら関係者でないとは断定する要素もない。調べてみよう。

ちなみに街へ出て昨日の事件の調査をしていないのは、昨日の今日でそう大きな動きを見せる事はないだろう、と嵩を括つての事だ。そんな迂闊な人物ならとうに警察に捕まっているか、少なくとも正体を突き止められている筈である。組織ぐるみの疑いがある事から、

事前に情報を集める必要もあるだろう。今、迂闊に動けば向こうに警戒される心配もあった。自殺事件を優先したいというのもある。

ひとまず眼の前の教室へと入り、隅の方にて個人を罵倒し、威圧している三人へと声をかけた。

「何をしてる」

ああん、と口汚く答えて振り返る、茶髪の女生徒とそれに似た風体の取り巻き二人。その間から視線を通すと、小柄で大人しそうな生徒が怯え、竦んだ様子で縮こまっていた。

到底、魔女には見えない。昨日の人物とは体格から違う。異様に髪が長い点は気になるが、個性であると思えば見逃せる。

長い歴史を持つ県内有数の女子高と言っても、こうした問題は後を絶たない。逆に異性の目がない分、女同士の方が陰湿でしつこい面がある。人が集まる閉鎖的な環境では、尚更であろう。

「苛めか……恥ずかしいと思わないのか、伝統と格式あるこの学校でそんなみつともない事をするなど。しかも複数でよってたかって」
すかさず反論する茶髪ボブカットの生徒、追隨する取り巻き。

「んだよ、オメーには関係ねえだろ！」

「スカしてんじゃねえよ、クソ」

「消える売女^{ビッチ}」

内心、一つ溜息を吐いた。同じ女として嘆かわしい限りである。

「そのネクタイは二年生だな。同学年の生徒を関係ないとは言い切れまい。それに廊下まで聞こえているぞ、お前達の声は。聞いたところから察するに彼女が気に入らないようだが、それなら一方的に責め立てるのではなく改善するよう頼むとか、もっと穏便なやり方があるだろう。仮にも名のある学校の生徒だというのに、どうしてそれも攻撃的なんだ」

これには、部外者は黙ってる、知ったふうな口聞くな　と返された。嘲笑混じりで、蔑む視線がぶつけられる。

茶髪の生徒が俺の脛^{すね}を蹴ろうと足を振り出したが、大体そんな事だろうと予想していた俺は　こうした攻撃は生徒の間でも手軽な

嫌がらせとして通例である　横に一步動いて回避した。

再び蹴ろうと片足立ちになったところで軽く胸元を押してやると、相手は尻餅をついて倒れる。正直、無益だった。

「茶髪の生徒。お前の顔は覚えた、これ以上続けるなら、今度は攻撃するぞ。」

少し考えれば解るだろう。苛められる方は痛いんだよ。嫌なんだよ。自分がされて嫌な事は人にするなって小学生の時分に教わらなかったか？　いつか、それは自分に返ってくるぞ」

少しの間、不穏な空気が漂った後、彼女は取り巻きに耳打ちされて立ち去っていった。その際に舌打ちを聞こえよがしにしたのは、捨て台詞の代わりであろう。

俺は縮こまっていた少女へと向き直る。

「大丈夫か？」

改めて見ると、長い前髪に顔が半分以上隠れていた。腰まで届く長髪は艶やかな黒、ほっそりとした体型は小柄で俺よりも頭一つ分は小さく思えた。掠れる程に小さな声が耳に届く。

「あ、あの……どうも、助かりました」

「いや、俺が勝手にやった事だ。余計なお世話だったら謝罪する。ところで」

魔女というのは、どういう事だ、と。

答えるように前髪のカーテンから覗かせた眼は、くりくりとしていて一目で美少女であると解った。綺麗というよりは可愛い系で、怯えを滲ませるつぶらなそれは子兔を思わせる。

「わ、私、その……良くない事を呼ぶ、体質で……」

すぐさま直感した。生まれ付き不幸や災厄を呼び寄せる人間がいるというのを文献で見た事がある。

「不幸体質か。または、霊媒体質？」

それは、居るだけで己と周囲に禍わざわいを呼ぶというものだ。彼女の意志に関係なく、問題を起こすのである。だから、先の三人はそれを気味悪がって責めていたのか。

「あ、はい……だから、私には近付かない方が良いと思います……」
不幸を呼ぶ女。成る程それが魔女と呼ばれる由縁であろう。しかしこのまま見逃すというのは忍びない。彼女は何も悪くないのだ。問題を起こそうとして起こしているのではない。なのに耐えている。じつと、他者を恨むような眼もせず、呪詛を吐く事も無く。それはまるで心を蝕む呪いのろいでさえあるだろう。

俺ならば、それを解き明かす事が出来る。

「待て。まだ話は終わってない。俺は浅葱香月だ。君の名前は？」

「さ、早乙女さおとめ・イチ一といいます……浅葱、さん？」

彼女が澄んだ瞳を覗かせる。

「もしかして、剣道部の……？」

「よく知っているな。お嬢繋がりで変な噂でも聞いたのか」

「い、いえ。入学してすぐの、剣道部員を全員倒してしまった事件で……知りました」

それか、と頭を抱える。俺はこれでも剣術道場に通っていた身である。男ばかり、それも猛者が犇き合う道場でしごかれて来たので、入学当初は殺気立っていたのだ。しかも剣となると負けたくない一心で事に当たった為、俺としても望まない結果が生まれてしまった。そうして現在に至っても友達が一人もない孤独な学園生活を送っている事の顛末となる。

はつきり言って、我ながら愚かだった。周囲が遠巻きに見るのも自業自得そのものであるう。

両掌を合わせ、拝むように言った。

「頼む、忘れてくれ。俺としてもあれは望んだ結果じゃなかったんだ。ただあの日は、連日勧誘の声をかけられて苛々してて、その捌け口にしてしまったというか……」

微かに笑う声があった。今度ははつきりした声音が耳に届く。

「思っていた程、怖い人ではないんですね。少し安心しました」
でも、と。

「やっぱり、私には近付かない方が良いでしょう。貴女を不幸にしたいくない。」

私は、魔女ですから」

寂しげな表情で、夕陽を背にそう語る　陰のある美少女は、自ら孤独を望んでいた。

場所を変え、校庭を見下ろせる場所にあるベンチに早乙女を座らせた。次いで隣に腰を下ろす。背後には花壇の間を通る遊歩道が右から左に伸びている。ここから左に行けば緑のトンネルやバラ園も見受けられる、生徒達にも談笑の場として人気が高い遊歩道だった。尤も、秋の寒空の下ではその人気も凍えている昨今だが。

拒絶しようと壁を作るこの生徒を無理やり連れてきた為だろう、不安げな視線が心に刺さる。

「あの、浅葱さん。お話というのは……？」

「君の不幸体質についてだ。それ、治せるかも知れない」

彼女は瞠目した。まるで信じられない事を聞いたようだった。

「な、治せるって……ウソ言わないでください。お医者様の治療も神社のお祓いも効果がなかったんですよ、生まれてからずっとなんです。何人も傷付けてきたんです。何度も傷ついてきたんです。それを、今更……」

絶望している言葉の内容とは裏腹に、疑い半分、期待半分という眼。それに彼女が長い間、深く悩まされてきたその片鱗を見た気がして、俺は何とかしなくてはと決意する。

傷は治るものだ。疑いは真実によって晴れるものだ。

そして、絶望は希望によって癒されるものであるべきなのだ。

「そんな対処法ではダメだ。異能というのは、一種の怪異なんだよ。覚えておくといい。この世には、常識では及びもつかない怪異が存在する。」

その一つが、君の持つその異能、不幸体質だ」

異能は必ずしも人間に対して有益を齎すものではない。こうして

自身やその周囲に害を及ぼすものだって当然のように存在するのだ。
「怪異？ 異能？」

「ああ。ある程度情報を提示する事は可能だが、今それは重要じゃない。ただ、そういうモノがあると理解してくれればいい」

とある博士が提唱した理論によれば、異能は精神が原因となつて表面化するという。ゴーストとは言うが幽霊ではない。心理学の広義では精神も含めてそう呼ぶ。

その人間のみが得られる能力を、異能と呼ぶ。

端的に言えば、精神の奥底に眠る潜在意識を表面化させる力だ。精神には深層心理と呼ばれる無意識領域があり、その個人に応じた現象を引き起こす。その人物が今まで生きてきた経験や人間関係によつて形成されてきた心象風景を具現化させるモノである。

術式のように状況に対応する汎用性と利便性はないが、前準備なく事象変移を行える速度に優れた面を持つ。

何かが引つ掛かる。そうだ、基本的に術式は同時に使用出来ない。術式同士は共存出来ないので相殺されてしまうのだ。そもそも同時に術式を使う並列処理と呼ばれる方法、デュアルキャストが行われていたとしたらその時点で俺が気付かない筈がない。それだけ大きな兆候がある。

つまり、人払いの術式と、殺害を目的とした術式があの場合で使われていたが、それにはデュアルキャストの兆候はなく、且つ対消滅現象を起こさず、二つの術式が存在していたという事になる。それでは理屈が通らない。異能でもない。あの時、一体何が起こっていたのか？

考え込んでいると、横から声がかかった。すっかり自分の考えに没頭していたようである。

「すまん、少し考え事をしてた。それじゃ、解式を」

俺の 解式 とはサイコメトリー能力である。この能力の範囲は厳密に定義されている訳ではなく、主な特徴として超感覚的知覚へ

ESPの感応能力とされている。解りやすく言うなら、対象から直感的に情報をキャッチする力だ。

例えば遺留品から残留思念を読み取り、その時の行動や居場所を解明するというように使う。だが解式と呼ぶ手前、それだけではないのである。読み取るだけでなく、解く事が出来るのだ。呪いや思念、異能を解読し、解き明かし、そして 解を導き分解する。

「始めよう」

だが、直前。最悪であり最高のタイミングで、邪魔が入った。

男の声。

「ダメだよ、それは。止めたほうがいい。止めるべきだ」

背凭れの後ろ、遊歩道の向こうに人影があった。

黒いマントとシルクハット。顔は帽子に隠れて口元しか見えないが、その口元も奇妙な白で覆われていた。

男 シルエットと声から判断した が顔をあげる。白い仮面だった。道化師の、奇妙な笑いが描かれた、仮面。

気配も前兆も脈絡もなく現れ、不気味さを醸すそいつは、道化師か魔術師か、はたまた怪人か。

そう、確か。教会に現れるシルクハットの主は、願いを叶えてくれる……だつたらうか？

「彼女の仮人格ベルツナと同一化しているんだ、それはね。鍵 を持たぬ者が安易に人の神秘へと手をかけるべきではない。それは神への冒瀆だよ。意味が解らない君ではないだろう？ 浅葱君」

既に立ち上がった俺は言葉を返した。

「どうして俺を知ってる。お前は誰だ」

本来なら不審人物として警察に連絡しても良いくらいなのだが、どうも こちら側 の人間である事を臭わせる言葉に、様子をみる事を余技なくされる。

しかし怪人の方かというと、そうではなく。

「見るといい」

そう言い、右手を突き出すと奇妙な現象が起こった。俺としては

見つけたものだ。

右掌を中心に描き出される円状の紋章があった。半透明で燐光を放ち、青い光の粒子　　霊子マナが周囲に漂い始める。

俺はそれに度肝を抜かれた。本来ならば秘匿すべき紋章技術マジ・クラフトを、突然これ程おっぴらに使用してみせるなど、まさかにも想像も出来なかったのだ。

「術式クラフト！？　こんな場所で！？」

怪人の、見えない口元が歪んだ、気がした。

砲弾の如き勢いで光の塊が発射される。向かう先は俺　　では、なかった。

隣にいる彼女、早乙女だ。刹那の間、連続的に不意をつかれた事で動けない俺は、呆然とそれを見ている事しか出来なかった。

だって、突然怪人が現れて、そいつが実は術式使いで、しかも何の躊躇もなく攻撃してくるだなんて　　何をどう考えても、至らぬ答えだったのだから。

しかし、幸運な事に、まるで奇蹟のように。

「えっ？　え、あ　　！？」

早乙女はベンチの前脚に突っかかって、転んだのだ。当然、怪人が放った光の砲弾は彼女に当たらず、その上を通過し、少しして消滅する。

緊張していた全身が一気に弛緩し、深く息を吐き出す。ゾワリと全身の毛穴が開く感覚も治まり、寄せた眉根が緩む。早乙女の死を目の当たりにするという最悪の事態は防がれ、内心胸を撫で下ろした。

冗談のような出来事だ。まさか彼女は運動音痴なのだろうか。だとしても、これは僥倖あやふさに過ぎた。ケアレスミスが命を救うなど、奇蹟以外の何物でもない。

しかし、続く怪人の言葉は俺を驚愕させる。

「彼女は不幸体質と同時に、最高の幸運を持っているのさ。呼び寄せる不幸は、彼女にだけは害を及ぼさない。及ぼせない。だから、

誰も彼女を殺せない。

「凄いのだろうか？　しかし、これでは願いを果たせなくてね。困っているんだ」

戦慄を隠せない。言葉そのものは聞き取れたが、俺の頭はそれを理解するのに少しの時間を要した。

この怪人は、早乙女を殺そうとしている。

何の変哲もない学校の片隅で、忍び寄る非日常の足音に、俺は好奇心と恐怖心が交ぜになった、奇妙な板挟みのダブルバインドの気持ちを抱くのだった。

第三章 慟哭は黄昏に消えて

怪人は巨大な紋章を頭上に映し出していた。あれが顕在化するの
は、怪人が心界言語テトラ・コードを組み合わせてああいう形に映し出している為
である。言うなれば、パズルのようなもの。一つ一つの文字は特に
意味を持たないが、ああして組み合わせ、形にする事で特定の現象
を引き起こす。

はつきりした虚構でも、確かな現実でもない半透明の文字。異能
とは異なる多様性を持った術式の力だ。これが齎す効果によって、
今この場では俺達二人だけしかこの怪人を認識する事が出来なくな
っている。周囲には見えない、聞こえない、解らない。

それは俺に 真昼の月 を連想させた。確かにそこにあるが、普
段は見えないモノを意味する言葉である。

ひいては、心を指す単語だ。

「浅葱君。君は問答無用で人の心を覗けるだろう。私は知っている
んだよ。この学校に来てから君の事はずっと見ていたからね。出過
ぎた真似さえしない子なら友達になろうとさえ思っていた。そう、
良い子でさえあればね」

心を覗けるのは、良い事などでは決してない。寧ろ悪い 覗か
れる側からすれば害悪でさえあるだろう。その事に良心の呵責を感
じる時は今でもある。人から咎められるような、倫理に反した行為
だ。けれど、だからこそ俺にしか解決出来ない、俺にしか聞こえな
い声を聞く事が出来る。人知れず泣いている心に触れて、癒してあ
げる事は決して悪い事ではないと信じたい。

力は使い方次第なのだから。俺は幼い時分に、それを所長から教
わった。

そうして俺は自身が異質であり続ける事を、怪異と戦い続ける事
を己に科す。浅葱香月は羊ではなく、牙持つ狼でなければならぬ。
そうでなければ、俺は 普通 ではないられないのだ。

怯えた声が傍らから届く。早乙女が身を起こして、しかしまだ立
ずに竝んでいた。口元に当てた手が震えている。視線の先にいる
怪人が、余程恐ろしいのだろう。

「お嬢さん……小さな魔女リトル・ウィッチ。君は目覚めてはいけない。しかし何故
かな、君達の縁えんは切った筈なのに、こうして巡り合っている。私は
それが理解出来ない」

不可解な言葉だった。縁を切る、というのが人に来るものだろ
うか。術式にそういう類の、観念的なものに干渉する作用ファンクショナルや型式な
どはまだ発表されていない。

術式は教会という組織によって管理されている。現在判明してい
る全ての型式は外典インデックス目録へと記録され、そこから各機関が許可を得
て必要な型式を引き出し、使用する仕組みだ。

俺の知らない術式、つまりこの怪人は独自に術式を構築している
可能性がある。

或いは、全く別の可能性か。

「答える。お前は何者だ」

「馬鹿の一つ覚えだね。聞けば教えてもらえらるでも？ 甘い、そ
れが通じれば誰も苦勞はしないさ。子供に過ぎる。少しは自分で考
えたまえよ」

嘲笑混じりの言葉に口元が歪む。嫌味なヤツだ。

周囲を見回す。眼下で未だ呑気に部活動をしている生徒達も、こ
ちらの異変に気付いた様子はない。あれだけの現象が起きたとい
うのに。本来なら教職員や警察を呼ばれてもおかしくはない。

そう、普通なら。

頭上に広がる盤状の紋章が、周囲から俺達を隔絶している。だが、
それはここから動けないという事を意味するものではない。

「ああ、無駄だよ。助けは来ない。私達の周囲には、外部の人間の
無意識領域に働きかける、認識障害の式を敷いているからね。興味
を逸らす、というのかな。視界に入っても見えず、音も有意信号と

して受け取れない。人間が持つ意識のフィルターに間接的に作用する術式だよ」

すぐに察する事が出来た。あの魔女が使っていた人払いの術式と性質に通じるものがある。昨夜、遅くまで資料を漁った甲斐があるというもの。

例えとしては、カメラレンズのピントが解りやすい。中央の人物に焦点を当てた状態では、周囲の景色がぼやける。奥行きがある情景なら尚更だ。

見えているのに、見えない。聞こえているのに聞こえない。これでは一種の異界である。誰も触れられない、真昼の月。

そういう場のお膳立てが済んでいるという事は……確実に、ここで殺すつもりに違いない。考える。どうやってあの怪人を撃退するか。相手は術式を使う。彼女を庇いながらでは難しい。裏をかく必要がある。

俺の中の怪異が、戦えと囁く

「早乙女を、殺すのか」

「そういうお願いをされたからね。しかし先の通りだ。どう事故を装っても、こうして直接的な手段に訴えてみても、彼女には届かない」

殺す手段が無いと言っている。しかし諦めたようには見えない。ならば次に狙うのは、別の対象。俺だろう。

「居合わせた俺も殺すつもりだな」

「そうだね、流石にその程度は解ってもらわなくちゃ。しかしだ。特別に君だけは見逃してあげてもいい。条件を飲んでくれたらね」
眉を顰める。考えが読めない。

「私と、手を組まないか？」

呆気にとられ、立ち尽くした。呆然と、差し出された手を見つめる。白い手袋、やけに小さい。ぐるぐる回る思考を必死に整理する。

「君と私は同類だ。人の心を見る力を持つ。君なら解るだろう？世の中にはどうしようもない人間がいる。そういう、屑のような振る舞いしか出来ず、私利私欲、我執に囚われて歪んだ人類を、より良い方向に導かねばならないんだ。心の読める私達がね。」

私達は解き放たれているんだよ。肉のシガラミフレムからね。精神をより純粹に理解する事が出来る。肉体という枠フレムの外側にいる私達はね。ザワザワと、心が騒いだ。コイツは何だ。何を言っているのだろう。気味が悪い。俺には到底及びもつかない思考だった。そんな事を思いつくなんて、コイツは今まで何を見て、何を聞いてきたのだろう。

「君だって、人の淀んだ黒い感情を知らない訳じゃないだろう？浅葱君。私は君の事を君よりも知っているんだよ。」

私と君は同じだ。人に生み出されたジーン・リッチ。社会不適合アウトサイ者ダイなんだからね。」

浮かんだ思考を消すように首を振る。これは世迷言だ。耳を傾けるな。俺がコイツと手を組むなど、万に一つも有り得ない。例えどれだけの悪意を、淀んだ黒い感情を、浅葱香月が見てきているとしても。

俺は、そんなものに囚われない為に剣を修め、心を鍛え、異能を制御する術を学び、探偵になったのだから。

頭に過ぎる過去の記憶を振り払い、言葉を吐き出す。

「人を導くと口で言っておきながら、いたいけな少女を殺そうとする。矛盾しているな。それとも大の為には小を切る、か？立派な独裁者になれるだろうよ。」

右の太腿に付けているガーターベルト、そこに備えられたホルスターからナイフを引き抜いた。右手で逆手に持ち、左手は開いたまま相手に伸ばして半身はんみになる。早乙女が息を呑む気配が伝わってきた。

「俺はお前とは違う。一つ一つの想いを大切にしたいくて、探偵をやっている。心を覗くという悪い事をする自覚があるから、せめて

より良い方向に力を使うと決めている。解るか、俺とお前は相容れない。俺は怪異殺しだからな。

お前は人の上に立ちたがっているだけだ。自らが人を導く？ 違うな、人を助ける事で自分の心を幸せで満たしたいだけ。メサイア・コンプレックス。不幸者を助ける自分は幸せであるという心理状態だ。

件の教会に現れるシルクハットの主もお前だな。これは推測だが……父親を失った心の痛みを取り除いて欲しい。数週間前にそう願った女子生徒を、自殺させた張本人だろう？」

今までに集めた情報と、お呪いの話が無関係である筈がない。何故あの事件は内々に処理されたのか。何故俺がサイコメトリーによって検死をする直前、遺体が消えたのか。何故生き抜く事を誓った母子が突然死別する事になったか。

全て、解っていたからだ。俺が心を読む力を持っている事、俺の背後にユニオンという異能犯罪を調査する特務機関がある事を。

怪人は答えない。だが、ソイツは鼻で笑った、ように見えた。的中だ。イカれた帽子の主は、羊を襲う害悪である。

「俺とお前は持っている力が同じでも、絶対的に行動理念が異なる。友達になんか、なれないんだよ！」

今、早乙女を殺せなくてもいざれ怪人はその方法を探り当てるだろう。ここで見過ごす事は出来ない。今まで苦しんできた早乙女一の際が、他者の悪意によるものではあまりに救われない。

傷つけられてもそれを誰かの、何かの所為と呪う事なく生きていくのだ。その強い生をここで失う事は、したくない。

怪人は、胸の前で両掌を向き合わせて。

「残念だよ、糞餓鬼！」

一転、纏っていた冷静な雰囲気を獯猛なものに変え、先と同じモノ生じさせた紋章術式による光の砲弾が放たれた。急激な事象変移によって霊子場が乱れ耳に届く霊子不協和音

(一瞬、声が籠った？ まさか、変声機か？)

右に回避しつつ推理する。あの怪人は変装の可能性があるかも知れない。そう考えるのは先程の白い手袋をした右手が、男にしては少し小さく見えたからだ。

(もしかして……女?)

更に考える。術式使いに正面から挑むのは不利の一手だ。この付近で人が少なく、且つ死角が出来る場所はどこかと頭の地図を開いた。早乙女の腕を掴んで強引に立たせ、駆け出す。戸惑いの声に心の中で謝罪をした。

目指すのは、遊歩道の先にある庭園だった。

噴水が中央に鎮座する、夏よりは幾分緑が寂しくなった庭園で、生垣を背に隠れた俺は早乙女を離れた。彼女はへたり込む。体力がないようだ。

「な、なん……で、こんな、事に」

状況に文句を言いたい気持ちはよく解るが、それでもあの怪人が俺達の命を狙っているという事実は変わらない。

早乙女と、協力を拒んだ俺をこのまま放っておく訳がない。やり合う策が必要だ。

「あの怪人はお前と俺を狙ってる。今ここで、それが不可能だと思いき知らせるか、もしくは」

殺すしかない、と。

酷薄と思われたのだろう。俺の言葉に早乙女は怯えた調子で返す。普通という仮面が外れかけているのを自覚する。けれど今そんなものはいらぬ。いる筈がない。常識を超えた事態に、どうしてそんなものが必要なのか解らない。

「こ、殺すなんて、どうして? ここ学校ですよ、皆がいるんですよ!? なのにどうして、そんな……殺人、なんて」

慄き震える声が、潤む瞳が、冷静な俺と彼女の違いを決定的に浮き立たせている。どうしようもない断絶。

俺が歪だという事実を思い知らされる。しかし、戦わなければ生

き残れない。この瞬間の現実はそうなってしまうている。死にたくなければ選択の余地はない。

「戦わないなら殺されるぞ。向こうは完全にやる気だ。あの行いを見ただろう。ヤツは常識から外れた超常現象を引き起こす。正しく、凶悪殺人犯よりも危険な人物なんだよ」

周囲に気付かせない隠密性と、装備を必要としない攻撃方法……そして恐らくだが、自分の体に相対速度ゼロで固定された認識阻害空間。

ざっと考えただけで、これだ。危険度で言えばステルス爆撃機と同じだろう。術式が教会によって厳正に管理され、怪異を縛る法制靈条約の敷かれる根拠がここにあった。

ああいうのを止める為に俺のような探偵や、背後の特務機関ユニオンがいるのだ。

白いレンガ道の両脇に生垣が並び、フレンチモダンな、或いは欧州風味の庭園には他に誰の姿も見えない。レンガ道の奥、噴水広場に隠れる俺達は怪人が現れるまで待った。そう時間はかからなかったが。

頭上に半透明な月を頂く怪人は、ゆっくりとした足取りで庭園に姿を見せた。俺の立位の場合で胸までの高さがある生垣が立ち並び、どうしても死角が多くなる。同条件だが、こちらからすれば前傾で隠れながら進む事で先程の正対時よりも距離を詰められ、且つ奇襲をかける事が出来る。

足音で判別する。怪人まではまだ距離がある。俺は早乙女に向かって囁いた。

「ヤツが見えるか？」

首を振る。効果範囲から逃れた事で、早乙女にはもう怪人を見る事が出来なくなったのだ。

だが、俺だけは見える。解るのだ。この眼はあらゆる霊的作用現象ククトを暴く能動性を内包する。シーン・リッチとしての、眼。グノーシス・エフェ

俺に、欺瞞^{ウツマツ}は、通じない。

「ここにいろ」

その場から動こうとすると、袖を掴まれた。

「ほ、本当に、本当に殺すの？ おかしいよ、こんなのおかしいよ」
早乙女の視線は俺が右手に握るナイフへと注がれている。混乱極まったよう、涙が零れていた。

だから、俺は言うしかない。現実とは非情なのだ。待つてはくれない、大きな流れなのだ。この一秒、生きていられるだけで奇蹟なのだ。

「やらなければやられる。さっきの事を忘れたか？ ヤツはお前を殺そうとしたんだ、今やらなければ、二人共死ぬかも知れないんだぞ！」

術式や異能による犯罪から、法律が守ってくれる訳ではない。自分の身は自分で守らなければならぬ。都合良く誰かが助けしてくれるなんてあり得ない。今この時、戦う意志が必要なのだ。

それが、決定打となった。

俺達の間には明確な断絶があると理解したのだろう。早乙女は手を離す。人を殺してまで生きようとする俺を、常識に縛られた彼女は、認める事が出来ないのだ。

「どうして、そこまでして……わ、私はそこまでして、生きたくない。どうして？ おかしいよ、浅葱さん、貴女は」
狂ってる、と。

その言葉に背を向けた。価値観の相違をここですり合わせる意味はない。何より、そう簡単に埋まる溝ではないだろう。俺達はこんなに近くにいたりというのに、一体どれ程の心の距離があるのだろうか。

ズキリと胸が痛む。どうしようもない歪さを思い知らされる。

早乙女と俺は、友達になれない。たったそれだけの事なのに、今まで何度も味わってきた痛みなのに、どうしてこうも悲しいのだろうか。

悲嘆に暮れようと現実待ってくれない。

足音が近づく。

怪人がすぐそこまで迫っている。俺は左手を腰のベルトにやり、ソレを引き出した。俺の隠れる生垣まで、後十メートル程。

足音が近づく。

正直、怖さはある。今まで人を殺した事はなかったが、殺す覚悟はしてきたつもりだった。死にたくない思いで殺しかけた事はあっても、直接的な殺害は、まだ未経験。最後の一步が踏み出せない。肝心なところで詰めが甘い。浅葱香月はそういう人間だった。

綺麗事を言うつもりはない。俺は人の心を覗き、人を殺そうとする、倫理を破る害悪だ。けれどそんな俺でも、誰かを守る事は出来るのだと、信じている。

善と悪は表裏一体。悪を為した結果が善を生む事もある。

今この時、俺だけが自分を信じてやれるのだ。

足音が、すぐ傍を通る。瞬間。俺は生垣から飛び出した。

ベルトから引き出したソレ 柔軟性と剛性に優れた繊維を編み込んだワイヤーを投げつける。背後から奇襲された怪人は避ける事も出来ず、巻き付くそれに抵抗も出来ないまま、両腕ごと拘束された。

探偵七つ道具が二、ワイヤー内蔵ベルトだ。先端のフックが手前にかかり、完全にロックされる。細かい振動が空気を震わせた。

「クッ、何だと」

怪人は油断していたのだろう。恐らく術式が使えるという優位から来る慢心だ。素人の術式使用にありがちなミス。本来なら心得を教えてくれる筈の教会に関与していないのが仇になった。

そして、術式使用を倒す方法を、俺が心得ていないとでも思ったか？

「オオおお！」

背を向け、肩に担ぐようにして引き寄せる。普通の女には出せない怪力に、体勢を崩した怪人は地面に倒れ、行動不能に陥る。

全身の力を局所に集中して発揮する技術、発勁はつげいというものだ。足の指から足首、脛、膝へと力を無駄なく繋げ伝導し、腰を通って背中、肩、そして腕へと収束して発揮される力は、瞬間的に膨大なものへと膨れ上がる。

女の身でも、サンドバッグを殴って破裂させる事が可能な程に。

術式を構築するには精神を集中させなければならぬ。仮人格ヘルソナの奥、心理的元型から心界言語を引き出すという事はそれだけ繊細な精神コントロールが必要なのだ。

それを忘れ、強引な出力を行って失敗すれば自滅するリスクがある。心が壊れるのだ。マトモな神経を持つ術式使いなら、先ず以つてこの状況なら使わない。

隙を突かれ、奇襲を受け、両腕を拘束され、更に体勢を崩されたこの状況ではそれこそ決定的。

俺はナイフを振り上げる。地面に倒れた際だろう、怪人のシルクハットが落ちていた。長いウェーブの黒髪が視界に入る。そこで一瞬、戸惑った。光景のフラッシュバック。

まさか、あの魔女なのか？　しかし先日とは口調も性格も違うような？

怪人の両手が、僅かに動く。首の後ろにチリツという感覚を覚え、危険だと直感、後ろに一足分飛んだ。

途端、何かが眼前を通り過ぎる。一度や二度ではない。あらゆる角度から縦横無尽。風切り音から判断するに、俺のワイヤーよりも細いものが舞っている。

「い、糸……？」

眼に捉えるのも難しい細さのソレが煌き、暴力的な速度で襲い掛かってくる。後ろに二度、三度と飛んで距離を離す。生垣、白煉瓦の道、スカート裾、ブレザーの袖に裂創が走る。

怪人はゆっくり立ち上がった。ウェーブの髪がサラと流れる。

「これを避けるか。凄いな、心を読んだかい？　それにしても正直

さっきのは危なかった、君、予想より戦い慣れてるし。このワイヤーだって予想外だった。面白いな、ビックリ箱みたいだよ浅葱君」糸は白い手袋から伸びている。五指の先端からそれぞれ一本ずつ……合計十本。リーチはこちらのワイヤーのが長いが、決め手がナイフである以上接近しなければならず、その為に掻い潜る必要がある。凡そそんなところだろう。

現時点での状況に限って言えば、怪人が優勢。

だが、こちらとて戦いの引き出しならまだ残っている。

「ん？ 諦めた顔じゃないね。まだ僕の知らない手を隠してる？

アブナイなあ。君は本当に、アブナイよ」

「お互い様だろ」

知らなくて当然だ。でなければ隠している意味がない。だからこそ、監視されていても見破れいのだ。

糸では切れないと解つたのだろう、怪人は肘から下の自由になっている腕で器用にフックを外し、拘束を逃れた。

「君のスペックを見誤っていた。ここは一旦、退かせてもらおうかな」

「逃がすと思うか？」

怪人の眼前に紋章が浮かび上がる。この時、頭上の紋章盤は消えた。隠れている早乙女のものだろう、驚く声があがる。

怪人が、仮面の向こうでフツと笑ったように見えた。早乙女を狙うのかとも思ったが、先程の事がある。狙うメリットはない。間違いない標的は俺。形成される光弾、対してだらしなく伸びきり地面に垂れているワイヤーを、遠心力を利用した撓みの反動で振り上げる。現在地から左手側、生垣を幾つか跨いだところにあるコテージ型のガゼボ 休憩所 へと投げつけ、リールの巻上げと自身の飛びあがる力により、大きく跳躍した。

地面から離れた俺の足先を通り過ぎる光弾と、それを追うように逃げる怪人を認める。屋根の上に着地した俺は、フックを外して跳躍、落下、衝撃を減殺する前転しつつの着地から追走。怪人が首だ

けで振り向き。

「御機嫌よう、浅葱君、早乙女君。楽しかったよ、次はもっと劇的にいこうじゃないか。はは、アハハハハ！」

「待てっ！」

後を追おうとすると、怪人は懐から何かを取り出した。ピンのようなものを外す。次いで溢れ出す、白煙。

「これは……」

スモーク・グレネード
発煙手榴弾だった。爆発するタイプではなく自衛の為に煙幕を張る手榴弾だ。視界を覆うカーテンに舌打ちし、万が一の奇襲を警戒して距離を取る。この状況で先程の糸に襲われれば回避出来ない。順当に考えて、逃げるだろうけれど。

あと一手、届かなかった事を悔やむ。また襲われる危険性を思うと、ここで仕留めておくべきだったのに。

緊張から解放された反動だろう、憚らず泣きじゃくる早乙女に、俺は何もしてやれなかった。後に残された怪人のシルクハットを手に、ただ泣き声から逃れるように、次の一手を考え続ける。

黄昏の空は、黒と橙のグラデーションを映し出す。

俺はふと、今は亡き養父に連れられて見にいった歌劇を思い出した。幼い頃、こんな時間だったのだ。

確か、ウィリアム・シェイクスピアのテンペスト。

我々は夢と同じ物で作られており、我々の儂い命は眠りと共に終わる。

そんなセリフを、どうしてこんな時に思い出したのだろう。

不気味な月が、夜の帳の中、顔を覗かせていた。

第四章 ゼロとイチの間に揺れる月

差し伸べた手は払われた。

座り込んだままの早乙女が言う。涙でくしゃくしゃになったその顔は、見ている胸が痛んだ。

「どうして、あんな事が出来るの。私には解らない。心を読むって何なの。私、どうしてこんなおかしな事に巻き込まれなくちゃならないの？ どうして……」

肺腑から搾り出される掠れた声が、心に突き刺さる。話しやすいよう膝を折るが、彼女は下を向いたまま動かない。

「あの怪人は君を殺したがっている。そう言っていたな」
眼の前では、力なく項垂れる小さな体が震えている。

「私が嫌われているから？ 魔女だから恨まれて、それでお呪いを使って、皆に消えて欲しいって思われたから？ でも、私、何もやってないのよ！

何も悪い事してないよ！ じつと我慢して、何も言わないで下を向いてただけ！ それなのに、こんなものって……ないよ」

俺には彼女の痛みを推し量る事しか出来ない。どれ程の心の傷を負っているのか、完全に解ってやる事は出来ない。

今はただ、言葉を重ねていくしかない。

「なら、どうして何もしなかった？ その気になれば歩み寄る事も出来たんじゃないのか」

こんな事を俺が言えた義理ではない。我が身を振り返ると耳が痛かった。

俺だって、友達が欲しいと思わない日はないというのに。

けれどそれは俺の場合、自殺と同義でさえある。

アンチノミー
二律背反。

「だって、怖かった。言えば余計傷付けられるんじゃないかって。

私が皆に嫌な思いさせてるなら、歩み寄るなんて出来る訳ないじゃ

ない。

今の自分から変わりたいと思っても、何から変わればいいのか、解らないの」

変化には痛みが伴う。それは当然だが、痛みを恐れるのも人の本能だ。俺だって、進んで痛みを享受したい訳じゃないのに、異能犯罪に関わっている。

本音を言うなら、俺だって変わりたいのだ。

彼女が両手で顔を覆う。

「あの怪人さんは、一体何なの？ 怪人さんはお呪いまじなの人じゃないの？ 出たり消えたりして、まるで幽霊みたいだった」

「常人にはそう見えるんだろう。ヤツは認識障害の術式と言っていた。幽霊のように神出鬼没なのはその為で、怪談として噂されるのもそこが原因だろうな。」

だが、敢えて言うならば、あの現象は人為的なもので、怪人は実在する人物だ。しっかりと対策すれば見えない現象は防げるし、戦う事も出来る。

不確実な怪談や曖昧なお呪いでは断じて無い。只の、犯罪だ」

早乙女が顔を上げる。瞳からは迷いが見て取れた。

「あの魔法みたいなものが、人の生んだものなの？」

「正式名称は紋章術式マキ・クラフトという。不可思議を現実にしてしまう技術
そうだな、言うなれば現代の魔法だ」

魔法、とオウム返しに口の中で呟いた早乙女の瞳には、先程よりも強い意志の光があった。

「なんでそんなものがあるの？ 浅葱さん、貴女はどうしてそれに関して詳しいの？」

ここまで目撃されてしまった手前、知る必要はないと跳ねつけるのは難しい。それに何より、彼女はまた襲われる可能性が高い。

ならば間違った知識や忌避意識を植え付けるより、正しく理解させる方が後々の為だろう。

「寒くなってきた。ここで長話もない、人目も気になるしな。ウチ

の事務所に来るなら教えるけど……どうする？」

早乙女は、迷いながらも頷く。

「うん……行きます。何が起こったのか、それとも起こってるのか解らないけど、浅葱さんが一生懸命なのは、嘘じゃないと思うし」
視線が合った。彼女は揺れる瞳で、躊躇いがちに頷く。濡れた黒髪から覗かせる美しい相貌に眼を奪われた。小顔で整った目鼻立ち、垂れ気味の眉が気弱さを際立たせている。

「ああ、俺は嘘をつかない」

「浅葱さんは、一つ一つの想いを大切にしたいって言った。悪い事をしている自覚があるから、せめて正しい方向に力を使いたいって優しい人じゃなきゃ、そんな言葉は出て来ない。だから、信じてみたいと思うの」

心が震えた。誰かにここまで言うてもらえた事など、今まで一度も無かったのだ。素直に嬉しくて、涙が出そうになる。

けれど、俺は告げなければならぬ。甘い幻想を抱く彼女に、冷たい現実を。

「死ぬかも知れないぞ。そして怪異を知れば後戻り出来なくなる。時には人を殺さなければ助からない状況もある。情けをかけた敵が、やがて自分を、仲間を殺す事だつてあるかも知れない。」

君は、それに耐えられるか？」

人を殺さないなんていう甘言がまかり通る程、優しい世界ではないのだ。今まで常識という微温湯ぬるまゆに浸かってきた彼女が、先程のように殺人を躊躇う彼女が、耐えられると思える要素がどこにあるだろう。いや、無い。

しかし、気丈にも早乙女は言葉を続けた。

「死ぬかもっていうのは、まだよく解らないけど、やっぱり嫌、だと思っ……それにこんな事言っつと笑われるかも知れないけれど、私は今の嫌な現実を吹き飛ばしてくるようなモノをずっと求めてた。ファンタジーの中の魔法に憧れてた。それってそんなにおかしい事じゃないよね？ 逃避ではあるかも知れないけれど、変わりたいっ

て願望はあった。

私は、あの魔法が何なのか知りたい。もしかしたら人を殺さないで済む方法だつてあるかも知れない。あの魔法なら、それが出来るかも知れない」

語りながらも瞳に決意を宿らせていく姿は、先程までの怯えた少女から少しずつ別人に変わっていくようだった。

彼女の胸に宿るのは知的好奇心だろう。それに突き動かされる人間は、時に予想もつかない発想と過程で、驚くべき結果を導き出す事がある。魔法に憧れる彼女が術式に魅入られたのも、当然だったのかも知れない。

術式を正しく理解させ、適切な対処をする力を与える。それが今、彼女にしてやれる最善の方法だと俺には思われた。

「事務所まで案内する。はぐれるなよ」

「あ、待つて、浅葱さん」

慌てて横に並んだ彼女は、ばつが悪そうに、窺いながら言った。

「あの……さつきは、ごめんなさい。八つ当たりなんてしてしまつて。貴女は私を助けてくれたのに」

「いや。嫌われるのには、慣れてる」

ハツとし、何か言いたげに口へ手をやる早乙女を置いて、先を歩いた。

* * *

事務所は二階にあるが、所長が煙草を吹かしていたのであの刺激臭が嫌いな俺は彼女を三階の自室へと招いた。高校生、しかも女を預かっているのなら気を使うべきではと散々抗議してきているが一向に改善しない。ドアを開くとダイニングキッチンがあり、その奥に三つ並んだ扉の一つへと向かう。一つは所長の部屋で、右側の奥まった場所にあるもう一つはトイレと浴室になっている。

靴を脱いだ早乙女が恐る恐るといった様子で足を進める。

自室は畳張りの六畳一間なので、どうしても過ごすスペースは狭くなる。箆笥たんすと文机が扉から左手側に並んでおり、右手側に襖と戸棚がある。襖の奥は布団などが収納された押入れだ。フロアリング張りのダイニングと違って和式なのは、依頼をこなした報酬を貯めて改装したからである。

照明を点け、中央にある座卓の脇を通り過ぎて窓のカーテンを閉める。

「お、お邪魔します……」

座布団を出して座らせると。

「緑茶と玄米茶があるけど、どっちが良い？ あ、メロンソーダもあつたな」

単純に俺の好みだ。これ以外は全て所長のアルコールである。

「め、メロンソーダ……いいかな？」

どうやら好みが合うようだった。

氷が溶けて音を立てる。ストローを吸う彼女は少しだけ頬が緩んでいた。心を落ち着かせるのにすっかり役立ってくれたようである。俺はある事を思い出して戸棚から一つの小包を取り出すと、彼女に渡す。

「これを持ってると良い。魔除けの効果を持つてんがんせき天眼石を封じたお守りだ。災難を遠ざけてくれるだろう」

先頃、怪人が言った仮人格ペルソナとの同一化が起きているとすれば、それは彼女に異能が宿ったのではなく、また先天的なものが目覚めたという事でもない。

彼女そのものが、怪異である可能性を指している。

解式によって解決する事など先ず以って不可能。厳密には不幸体質という異能を解き明かす事自体は出来るが、その瞬間に彼女の心は破壊される。今俺達が意識を持ち、会話しているこの性格が仮人格である。心理的元型を守る為の、これまでの人生経験から無意識のうちに形成された、誰かと接する為の人格とされる。

これが壊れるとなると、赤子に近い状態になってしまふ。下手をすれば死んだように眠る。植物人間になるかも知れない。

不幸体質あつての彼女。彼女あつての不幸体質。因果なものだが、そう生まれついてしまった点には同情せざるを得ない。

だがその点、あのお守りならば何のリスクもなく災難を遠ざける事が出来る。無論完全にはないが、無いよりは良いと思つたのだ。「ありがとう。やっぱり、浅葱さんは優しいね」

その何気無い感謝の言葉に、思う。何故こんなにも彼女の言葉は心に染み入るのだろうと。早乙女イチとの会話は、俺の孤独に冷え切っていた心の隙間を少しずつ埋めていくように感じられた。

一息ついたところで、早乙女が言った。

「浅葱さんは紋章術式って言つてたよね。実際のところ、あれつて何なの？」

内容についてこれるだろうかと不安を抱いたが、彼女は真剣な表情で見つめてくる。決心の出来た俺は遠慮なく術式の解釈に入った。「理論の根底にあるのはカール・グスタフ・ユングの提唱したユング心理学における分析心理学の概念で、集合的無意識《collective unconscious》と呼ばれるものだ。

掻い摘んで説明すると、我々人間は肉体という一面だけで見ると一人一人が分離した個体だが、心の側面から見ると奥底で一つに繋がっている、というものだ。

そういつた人格やコンプレックスという心の深い部分より更に奥、無意識の領域には集団や人種、それこそ文化を超えて根源的に存在する普遍的な心のイメージがあり、これは様々な時代や民族に言われる神話に共通したイメージが現れる事から、人類は心の奥底では繋がっている、という理屈になる。

この共通して抱かれるイメージが元型アーキタイプであり、元型が存在するとされる領域が集合的無意識だ」

鳩が豆鉄砲を食らつたような顔になつている早乙女を一瞥し、と

りあえずの反応を見る。

「なにを言っているのか解りません」

戸棚から解りやすく書かれている本を取り出し、ページを開いて見せたが、その前に少し例え話をする事にした。

「このコップを人間の内面だとしようか。水面より下は無意識、上は表層意識」

コップの底にお茶請けの小さなチョコレート菓子を入れる。

「お菓子が元型だと考えてくれ。俺は術式を使おうと強く集中する。そうすると俺の心の力動が、この元型へと向かうんだ」

ストローを差して、チョコへと刺した。

「この力動を伝って、元型からは心界言語が打ち出されてくるんだ。これを使って術式というチョコの味が、表層意識から現れる。こんな仕組みだ」

早乙女が、成る程と頷いた。概要は理解してもらえたと思ったので、資料本の紙面を指差した。

「今のは例え話だが、今度は専門的にいこうか。術式はまず最初にこうしたいという願いや欲求が心の力動となり、無意識領域へとそれを発信する。」

そしてそこにある術式の元型 ヒスティス・ソフイア 不朽智慧がそれを受信し、応えるように発信された心界言語を人間が外界へと描き出す事で現象を発動させる」

紙面から眼を離し、補足する。

「何故、願いや欲求という心の動きが不朽智慧から心界言語を発信させる要因になるかという事について、詳しい事は解っていない。心界言語の外界透写によって大気中の霊子マナに作用し、グノーシス・エラエクト霊的作用現象を引き起こす 何故こんな不可思議が起こるのか……一応は術式という形で証明されているが、ゼロからイチを生み出す理屈はまだ完全に解明されてはいないんだ。」

ただ、願いに応えて発信された心界言語を呪文のように組み合わせ、意図に沿うよう並べる事で式とし、それは大気中に漂う霊子を

媒体として現実化する。似ているものでルーン文字というのがあるな。ああいうお呪いましなや呪いというものよりは、確かなものだ」

余談だが、不朽智慧はその性質上 賢者の石 と言われていると付け加える。

「あ、あうあう……」

情報過多でだろう、頭からシユウシユウと煙を立てているような様子の早乙女に、今日はここまでと宣告した。自宅の場所を聞くと距離がある為、後で所長に送らせようと考え。夜に女子高生が一人出歩くなど、危険極まりない。俺はまあ例外としても。

まだ異能についての説明が残っているが、こちらは後日に回す事にした。

（そういえば、怪人の事で伊庭に聞かなければいけない事があったな）

あの長つたらしい名前をした男を思い出す。やはりあの怪人と魔女、伊庭には何かしらの関係性があると思うのだ。長いウェーブの髪をした女……そして、鍵という言葉。

解らない事はまだある。伊庭の背後にいる組織、彼を差し向けてきた我謝御霊会がしやごりようえは、どんな形で事件に関与しているのか。

俺は予感するのだ。俺と早乙女は、いつか大きな流れに巻き込まれるのではないかと。

或いは、既に巻き込まれているのか。

* * *

原因は所長が酒を飲んだ事だ。更に早乙女の家は両親の帰りが遅いというので、彼女の帰る手段が事実上無くなってしまった事に起因する。

人を泊まらせるのは初めてだが、修学旅行の延長のようなもの思えばそう戸惑う事もなかった。早乙女は相当、気後れしていたが。

俺は自室に敷いた二組の布団を一瞥した後、文机に向かった。もうトレッドマークとなつて青いリボンを解き、その下でポニテールを縛っていたゴム紐を外す。背中まで届く黒髪は、母親から譲り受けたものらしい。

らしい、というのも実の両親の記憶がない為だ。気が付けば養父母に育てられており、そして不運な交通事故が二人の命を奪つた。養父と近い縁者である愛染所長が、そこで俺を引き取つたのだ。不幸中の幸いか、所長は遺族から養育費を受け取つたらしく、生活には困っていない。

養父は俺に剣術を教えた。それが養父との最後の繋がりと思えた俺は必死の思いで腕を磨き、ついには剣術道場で右に出る者はいなくなる頃、俺は道場から追い出された。

そこで、眼が覚めたのだ。人を貶める為の剣など、俺は求めてはいなかったのだ。がむしゃらに追い求めていた強さは、人を打ち負かすようなものではなかった筈だ、と。

所長から助言を受けたのは、そんな時だ。力は使い方次第。善きも悪きも、己が決める。力はただ使われるだけの道具であると。

想い出を振り返っていて一区切りついた頃、早乙女が自室の扉を叩いた。

「あのう、お風呂いただきました……入っていい？」

どうぞ、と返事をする、紺色の浴衣に着替えた彼女が髪を拭きながら入ってきた。桜色に上気した頬や濡れた瞳がよく見える。艶やかな長い髪は首の後ろで纏められていた。

湯上り美人である。

「学校でもそうすればいいのに」

顔がよく見えるのだ。つぶらな双眸は同性でもかわいらしく映る。「ふえっ!？」

途端にオドオドしだすのは、こういう事を言われ慣れていない為だろうか。

「い、いや、私の顔なんて見ても誰も喜ばないし、というか人様にお見せできるようなものではない！ 風呂上りだから今はまだしも、」

「そうか？ かわいいと思うが」

すると、途端に土下座を始めた。

「すみませんデシタもうそのあたりで許してクダサイ」

「謝るという行為に行き着く理由が解らないんだが」

跳ねるように体を起こし、わたわたと手を振る。

「だってだって、学校でなんて言われても恥ずかしいよ！ そう、これは浅葱さんみたいに皆の憧れになってる人には解らない悩みなんです！」

聞き捨てならない事を言われたので、少し戸惑った。

「皆の憧れ？ 誰が……俺？ ちよつと待て、どう見てもそんなふうにはなっていないぞ。今日だってクラスメイトからは腫れ者扱いだし、登校する時は白い眼を向けられてたし」

早乙女は首を傾げる。あどけなさの覗く仕草だった。

「私の聞いた限りじゃファンクラブとかあるみたいだけど。三年生からもお姉様って呼ばれてたし」

「ど、どういう事だ……！？ お前、耳おかしいんじゃないのか！

？ それとも頭か！ 信じない、俺は信じないからな、そんなデータラメー！」

「ひいっ！？ すみませんでした、許して下さい！」

「またも土下座する早乙女。ぴょんつとバネ仕掛けのような速さだった。」

「あとお風呂で考えてたんですけどいきなり押しかけてきて夕飯ご馳走になった拳句泊めてとかもうホント大変なご迷惑をお……！」

苦しげにそう吐き出すという事は、相当負い目を感じているのだろう。うちに泊まる事を提案した手前、少し心苦しい。

「いや、それは別に何の問題もないんだけど。食事の用意とか手伝

つてくれたしな」

「というか学校ではあの怪人さんから助けしてくれたのに八つ当たりとかもう私どうしようもない屑ですみません……」

どうやら腰を落ちて着けた事で冷静になり、ここまで後悔させているようだ。苦笑する。

「お前、結構ネガティブ思考なんだな。まあ、あんな状況に初めて出くわしたなら仕方のない反応だと思うよ。気にするな」

落ち込む早乙女の頭を撫でた後、風呂に入ってくる、と部屋を出た。

戻ってくると、彼女は布団の上で眠っていた。どうやら先の資料本を読んでいたようだ。勤勉な性格が窺える。気力が尽きてしまったようだ。その小柄な体に布団をかけ、照明を消す。

「あれだけ緊張の連続だったし、無理もない」

俺だって、初めは震え上がった。精神的な疲れというのは気が緩んだ瞬間に、爆弾のように襲ってくる。ここまでよく持った方だろう。

まだあどけなさの残る横顔に、過去の自分を重ねる。あの怪人は彼女の心に傷を残した。これから先もずっと残る。誰かに死ぬ事を願われた……それはどれ程時間が経っても、癒えぬ傷痕トラウマになるだろう。けれどそれは大なり小なり、誰にでもある傷だ。

生きていくだけで誰かに恨まれる。現実は理不尽で、不条理なものだから。

アイスク魂に刻まれた痛みの記憶は、薄れはしても消える事などあり得ない。

生きているから痛みがあり、また変化には常に痛みが伴うもの。痛まない心など、死んでいるのと同義である。

願わくばその痛みを乗り越えた彼女の未来に、幸多からん事を。

* * *

朝の六時である。登校時間より二時間程前に起きた俺は、まずシャワーを浴びた。所長の部屋をノックし、返事を確認。早乙女を起こして朝食の用意を始める。

俺が和食の心得を養母に仕込まれていた事もあり、それ以外にも茶道、華道、書道などの芸能を厳しく教わった。所長は俺に厨房を任せっぱなしだった。

すると、間延びした所長の声。

「おはようカツちゃん。昨日の子は？」

「おはよう。早乙女はまだ起きて来ない。あとカツちゃん言うな」
料理が出来る頃合になって置き出してきた所長が、頭を掻きながら洗面所に向かう。フラフラした足取りの後に残されたアルコールの残り香に眉を顰めた。

なかなか早乙女が起きて来ないので、様子を身に自室へと戻る。
寝乱れた姿でだらしない寝顔を晒していたので、遠慮なく揺すった。
小柄な癖に出るところは出ている。豊かな双丘が体に合わせて揺れた。

「起きろ、朝だぞ」

「うつん、お母さん……？」

「誰がお母さんだ」

「じゃあ、お父さん……？」

「幸せな寝言だな」

「うーん、あと五時間……」

憎めない寝顔に微笑が漏れる。どんな夢を見ているのだろうと気になった俺は、そんな気持ちで早乙女の手を取った。

悪い事だというのは解っている。けれど、普通の家庭というものがどういうものなのか、俺は知りたかった。我侭を許してくれ、と
心中で呟き、神経を集中させる。

サイコメトリー能力だ。心を覗く異能が、触れている早乙女の手から彼女の心を伝えてくる。

俺は息を呑む。彼女の心は、一面が炎の海だったのだ。

燃え盛る火焰が、家宅を　彼女の自宅だろうか　を飲み込み、
焼き尽くしていく過程が瞼の裏に浮かび上がる。

この悲惨な映像は、恐らく彼女の心の傷に起因するもの。

おばあちゃん。そんな言葉が頭を過ぎる。

消せない記憶……早乙女の抱える、癒えぬ心的外傷トラウマは、大切な祖母を失った痛みだったのだ。

炎　憎悪と愛、破壊と創造を象徴する概念だ。人の動機としてもエネルギーとしても、一度勢いがつけば強力なものになり得る面を持っている。

どうか彼女が、ネガティブな方向へ進まぬようにと祈るばかりである。

* * *

早乙女を一度家に帰らせてから学校に向かった。いつものように授業をこなして訪れた昼食の時間、これまたいつものように一人であんパンを頬張っていると声がかかった。廊下で俺を呼んでいるのは　早乙女である。食事を中断、嚙下して歩み寄る。

「早乙女。どうした、俺に用事か？」

「あ、その、えっと……」

クラスメイトの視線が集まっている。俺は意に介さず、緊張で言葉を発するのも難しい状態の彼女を慮って。

「ここじゃ何だ、場所を変えよう。屋上でいいか？」

頷く背を押して、移動した。

「き、緊張して心臓が痛かったです……」

胸を押さえる様子が微笑を誘う。小動物のようである。

「お前は人が多い所が苦手そうだな」

「ば、バレちゃった？　実はそうなの、話すのとか苦手……」

それにしても俺という時、結構饒舌である。一晚泊めた手前もあるだろう。心の距離は以前より確実に縮まっているようだった。

しかし、彼女と俺は友達ではない　まだ。

それを語るには、どこからが友達なのかという定義が必要になるが、俺は意図的にそれを思考から外す。

「それで、何か用事でも？」

「あ、うん。お昼一緒にどうかなって」

そこで、背後のドアが勢い良く開いた。次いで放たれる大音声だいおんじょうに身を竦ませる。

「話は聞かせてもらいましたわ！」

揺れる金髪のツーサイドアップ、裏山で羽根を休めていた鳥の群れが驚いて一斉に飛び立つ羽音をBGMに、威風堂々と、或いは傍若無人に盗み聞きを白状したのは。

かんざき・れいこ
神崎零子、その人であった。

第五章 深い森

屋上の扉を開け放って現れ、腰に両手を当てて仁王立ちをするお嬢の顔には不敵な笑みが張り付いている。様になっていて格好良いのだが、しかしここは屋上で、今日は少し風があった。ちよつとははためくスカートを押さえた方が良いのではなからうか。

「話は聞かせ、」

「二度も言わなくていい」

余程自分の存在を誇示したかったのだろう、不満げなお嬢が口を尖らせる。

見ればいつもの取り巻きがいない。ついに彼女達にも見放されたか、可哀そうに……と思っていると憐れみの視線を察したのか、烈火の如く言葉を吐き出した。

「その眼を止めなさいな！ 先日、事件の事を話しましたでしょう、あれから私も調べてみたのです！」

そこで一旦区切り、声を抑えた。

「とは言っても、勝手にお爺様のパソコンを覗いてみちゃったりしただけですが」

成る程、事件に関与する話を取り巻きに聞かれなくなかったようだ。

「お前は覗き見とか盗聴とかが好きなのか？」

だとしたら業が深い。

「ち、違いますわ、仕方ないのです！ 家の中では誰も私に教えてくれませんから。神崎全体で私をそういう話題から遠ざけようとしているようで、これ以上事件が長引けば学校に来る事も難しくなりそうです。そうなる前に、探偵である貴女に情報を、と違って」

「お嬢……」

正直、助かる話ではある。さりとして彼女が俺にここまでしてくれる理由というのも、明確なものが思い当たらない。もし友達だと思

つてくれているとしたら……いや、違っだろう。そんな筈はない。
俺はそれを考えてはならない。

懊悩しているのを余所に、お嬢はそっぽを向いた。頬が紅潮しているのは照れているからだろうか。

「わ、私としてはクラスメイトを危険に飛び込んでいかせる訳ですから、伝えたくなんてないのですけれど！ 貴女以外に、信じられ……コホン、相応しい人がいなかったのでも、と続ける。顔に陰影が浮かんだ。

「学校の外で浅葱さんが探偵として何をしているのか、私は詳しく存じませんが……多分、あの事件について調べているのでしょうか？ 先日の自殺事件と、眠りの森の魔女。あれをそのまま放っておく事なんて、貴女はしないでしようし、私にも出来ません。

教えてくださらない？ 今、この街で何が起こっているのか」「お嬢は知らなくていい事だ」

冷たく言った。彼女を巻き込む訳にはいかない。神崎財閥の令嬢なんて、動くには大き過ぎる立場、重荷でしかない。

それに、傷付けてしまうかも知れないのが怖いのだ。俺の歪さを眼にして、心に傷を負わせるぐらいなら……ここで突き放してしまうのが、一番良い。

お嬢は顔を伏せて下唇を噛む。

そもそも、友達でさえない。友達のフリをして、普通を装ってきた関係でしかなかった。早乙女は例外として、これ以上誰かを巻き込む事など、したくないのだ。

俺はそう心中で気持ちを整理すると、ふと胸に針で刺したような痛みを感じ、眼を細める。この痛みが、俺を迷わせる。普通になつて何が悪いというのだ、己の異常さなど捨ててしまえ そんな悪魔の囁きも聞こえてくるのだから夕チが悪い。

臍ほそを噛む。お嬢の、普通の側に居過ぎたのだ。日常に憧れはしても、そちら側にはどうしてもいけないというのに それは、誰かと心を通わせれば浅葱香月のサイコメトリーが、制御を失うという

事に起因する。

俺という個が溶けて、周囲の心の声を無差別に拾ってしまうようになるのだ。それは異能の暴走である。生者の想いも死者の思念も入ってくれば、脳が処理し切れずパンクするのは道理。一人分の器に二人は入れない。

無意識領域では全ての人が繋がっている。俺がサイコメトリーによって個という垣根を越える理由はそこにある。だから、俺にとって友達を作るといのは 自殺行為でしかない。

他者との間に心の壁を造る事が、浅葱香月の生きていく最低必須条件であるのだ。

お嬢は言う。

「カヤの外にいる私でも、神崎と接触を持った人ばかり狙われているのは、許せないのです！」

それはまるで、心の声を吐き出しているように思えた。

警察に以前聞いた内輪の事情では、事件が大々的に公表されない理由の一つにそれがあるといふ。神崎財閥という多角的に事業を展開する巨大な企業集団が狙われている。そう流れる噂は全て情報規制によって押し殺され、表向きそんな事実は無いように装っている。お嬢がこうして学校に來れているのもその証拠だろう。

各国特務機関同士のG4首脳会議サミットによって制定された制霊条約とこの間もあるが、これはまた話の裏側に進むべくトルなので割愛する。

もしどこかから事件の全貌がリークされ、神崎が渦中にあると広まればもしや事業に後ろ暗いものがあるのでは、という世評が吹き荒れるだろう。傘下に幾つもの諸企業を抱える財閥としては避けなければならぬ事態だ。しかも相手はたかが個人。眠りの森の魔女である。

普通なら、個人の攻撃など権力によって呆気なく圧殺されるが相手が術式を使うとなると、その脅威はそれこそ軍隊規模にまで

引き上げられる。

怪人が使っていた紋章術式は初歩の初歩、それもマトモな型式タイミナルを習得していない我流だった。察するにあの認識阻害空間　この構築に至った道理は不明だが　以外は恐るるに足りないだろう。逆に、もし魔女が怪人と同一人物であるとするなら、あの隠密行動ステル性が最も脅威となる。誰にも知られず犯行が可能なのだ。周囲からはそれこそ被害者が突然眠ったように見える事だろう。

魔女が集中的に神崎の人間を襲っているとなると、神崎財閥は何か恨みを買ったような事をしたなど、何か後ろめたいところがあるのかも知れない。

考えるに恐らく、あの伊庭がこの街に現れたのも我謝御霊会がしゃごりょうえが神崎の上層部に依頼されたからではなからうか。そう考えると納得がいく。彼については今朝方、怪人の用件である男に電話したのだが留守番電話に繋がってしまった。着信に気付けば折り返してくる筈なので、今は待ちの一手。

携帯電話を見ても、伊庭からの着信履歴はない。

神崎は何かを隠しているのだろうか。魔女が意味も無く神崎を襲うとは考えられない。法律を犯し、条約違反もしているという安くは無いリスクを負っているのだ。聞く限りでは伊庭の婚約者らしいが……

「でも、犯人の姿がまだ解っていないのではどうしようもありませんわよね。神崎がシークレットサービスを雇う数も先日増したみたいですが、一向に手がかりは掴めないようで」

俺は眼を剥いた。

「は？　どういう事だ、犯人像なら以前、俺が」

口を滑らせた事に気付き、口元を押さえる。

「いや……魔女の風貌は割れた筈じゃなかったか？」

お嬢は首を振る。

「お爺様のパソコンにもなかったくらいですから、公表されている

ワケがありませんわ。やはり浅葱さん、事件について何か知っているのではありませんの？」

「言えない、と言ったろ。すまないがこれ以上は話せないんだ」

深入りさせるべきではない。お嬢に何かあれば、事件は表面化を余儀なくされる。そうなれば神崎財閥もただでは済むまい。下手をすれば犯人はテロリストと断定され、軍隊が出動してくる可能性さえ生まれる。

通常の警察機構ならそんな物騒な動きにはならないだろう。この事件にユニオンや御三家、我謝御霊会が関わっていないければ、だ。

とは言ったものの……やはり解らないのは、犯人像が未発表な事だ。あれから時間が経っている、本来なら既に公表されている筈なのだが

思い至る。警察の内部に忍び込み、犯行を行える型式ターミナルがあるではないか。怪人の、認識阻害術式。いや、だが、あれは比較的近距离にいれば対象を視認出来る性質だった。作用ファンクションの効果を狭められるというのなら、あの奇襲時にしなかつた理由が無い。

更に考える。自殺事件の遺体が、検死直前に持ち出され、事件そのものを内密に処理された前例だ。俺はそれで内部関係者がいるのでは、と仮説を立てた筈である。

怪人のあの格好は変装だ。中身は女。長いウェーブの髪。この共通点だけで犯人を搾り出すのは難しい。手詰まりか、と顎に手をやる。

あと一手、何かあれば……

その時、胸ポケットの携帯が鳴った。会話相手であるお嬢に出てもいいか承諾を得て、通話に出る。

「もしもし」

「俺だ。今話せるか」

伊庭（中略）吉兼。良いタイミングである。

「ああ。お前に聞きたい事があって朝にかけたんだが、何をしていたんだ？」

『こつちの事情……と言いたいところだが、情報屋と接触していた今は落ち合った雑居ビルの中なんだが、どうしてこう色々散らかっているんだか。暗いし』

何でも、情報屋が出ていって時間を置いてから帰るように、と言われたようである。確かに一緒に出て行く訳にはいかないだろう。特に裏家業としては。

伊庭の少し碎けた調子に、嫌味にならない程度の溜息を吐いた。

「足元に気をつけるよ。それで、情報というのは？」

『眠りの森の魔女だ……ふん、仰々しいフレーズがついたもんだな。あいつは本来大人しい性格で、温厚だっていうのに』

これじゃまるで暗殺者だ、と。

「温厚だった？ アレでか」

初遭遇の時、恐ろしい眼つきで睨みつけられた事を思い出す。下手をすれば襲われていた事柄である。その経緯もあって鮮明に思い出せた。

「到底、そんなふうには見えなかったけどな。この世の全てを恨んでいます、みたいな感じだったぞ」

『だろうな。多分だが、洗脳されてる筈だ。脱走時、薬物が幾つか持ち出されていたらしい』

「洗脳？ 脱走……」

聞き慣れないフレーズが飛び込んでくる。首の後ろが粟だった。

何か、俺は大きな事に巻き込まれているのではないかと

『うむ。少し長くなるし組織の機密に関わる事だが、背に腹は変えられん。ただしオフレコで頼むぞ。』

我謝御霊会で生み出された術式実験用のクローン人間がいたんだが、俺の婚約者はソイツの母親役として世話をしていた。クローンは術式調整体と言って紋章術式の扱いに秀でた人間を人工的に生み出し、兵士として供給する計画でな。周囲の期待も大きかった。し

かしその第一号が伊庭家の婚約者を人質に脱走、この数ヶ月間探し回っていたところに目撃情報のタレコミがあり、俺が駆けつけたという事の顛末だ。伊庭の家ではこれを内々のうちに片付けたいらしくてな』

血の気が、引いた。

何だ、今の話は。クローン？ 術式調整体、兵士として供給？

それではまるで道具ではないか。同じ人間とは思えない扱いだ。

術式を扱う為に遺伝子操作されて生み出された人間を、デザイン・ベビー 或いは、ジーン・リッチチという。

それは俺と同じ境遇だ。ただ、俺の場合はそう聞かされて育てられたというだけで親はいたし、厳しい躾しつけと稽古しゅこの合間に労わりを垣間見る事が出来る程度には、優しかったと思う。

なら、あの怪人は？

異能を扱う為に生み出され、強化手術の過程で道具の如く扱われ
ては、愛も優しさも知らず、赤の他人に世話をされながら育った
それは俺と合わせ鏡の存在では、ないのか。

『おい、聞いているのか浅葱』

「あ……」

我に返る。すると、沸々と怒りが湧き上がってきた。この伊庭に
対してだ。非人道的な行いを平然と悪びれる事無く口に出来るなど、
気が知れない。

そんなもの、気が触れているとしか思えない。

「伊庭！ お前は どうしてそれを止めなかった！ どうして受け入
れられる、そんな行いが人に許される筈ないだろ！」

だが、その言葉は届かない。羊の皮を被った狼は、もう狼の群れ
に戻る事が出来ない。羊になりきる事も出来ない、哀れな裏切り者
アンビバレンスな二律背反アンチノミー。

電話口からは尖った氷のような声。

『何を言ってる？ 青い言葉を口にするなよ、浅葱。もしかして下
らない倫理にでもしがみ付いているのか。術式を学び、異能を携え

た非人間の癖に。まさか日向ひなたに居過ぎて人間性ヒューマニズムに目覚めたとしても言うつもりか？ そんなのは笑い話にもならん、お前も俺も、日陰でしか生きられないバケモノだろうが』

自覚しろ、という言葉が胸に刺さる。今度は針では済まない痛みだった。無情な言葉を告げた伊庭は、しかし俺の眼を醒まさせてくれた。

俺は歪であると。この二人の傍にはいられない、異質な生き物なのだという事を、思い出す。

俺の中の怪異が、目覚めると囁く。

優しい夢を見ていられる、眠りの時間は終わったのだ。

『続けるぞ』

まだ足元の定まらない意識を強引に呼び戻す、伊庭の声。

「あ、ああ……」

『お前は 鍵 の在り処を知っているか？』

鍵、とオウム返しに呟く。鍵。その言葉は聞き覚えがある。怪人が言っていたものだ。

そう、確か。

「鍵を持たぬ者が安易に人の神秘へと手をかけるべきではない。それは神への冒瀆……」

『その言葉……！ お前、あいつに会ったのか！？ クソツ、やはり彼女を手放す訳がなかったか！ 催眠洗脳を定期的に施す性質上、近くにいるとは思っていたが！』

キリカ、と伊庭は言った。

恐らくはそれが婚約者の名前なのだろう。電話口の向こうで、何かを蹴飛ばす音が聞こえる。苛立っているのか。伊庭は婚約者を利用されていて、だから平静ではいられないのだろう。俺には、よく解らないけれど。

少しして治まったらしく、平静に近いが張り詰めた声で言葉を継ぐ。

『良く聞け。アイン　術式調整体は鍵の在り処を探ってる。しかしそれは簡単に手に入れられる場所じゃない。正しくこの一帯でも嚴重な場所に安置されている』

それを奪われてはならない。伊庭はそう続ける。

「それは、どこなんだ？」

『　神崎財閥の』

俺は視線を動かす。こちらを見つめる、憂いを帯びた碧眼と合った。

『　令嬢、神崎零子の』

どこか、意識が遠くなる感覚を覚えた。平衡感覚が危つくなり、地に足がついていない感じさえ、する。

『　心臓だ』

まさか。ちよつと待ってくれ。そんな話があるものか。

いや、だが、しかし確かにそこは誰も思いつかない隠し場所だ。

その発想の奇抜さ見事さ非常識さ、そして気味の悪さに嘔吐感を覚える程に。同時、曖昧になっていく現実感、夢を見ている途中のような浮遊感は、どこか体を他人のもののように感じさせる。

何故、彼女なのか。せめて彼女だけは危険から遠ざけようと思っても、その心臓が動いている限り、お嬢はこの世界で最も危険な人物へとなってしまうた。

黄金の鍵。俺はその正体をこの時知る事になる。鍵が持つ精神干涉の力はサイコメトリーの比ではない。更なる上位概念　強制的に無意識領域へと上書きされる、催眠洗脳というマインド・コントロール。

それは、神をも冒瀆する魔導具だ。

人から人へと伝達する、情報の最小伝達単位である模倣子ミームを用いて、予めその結論に行き着く事が決定付けられているように動く、無意識下の精神操作を可能にする。

例えば、新聞やテレビから人々が日々摂取する情報一つ一つが、

模倣子という形だ。それが伝播し、家族に拡散し、やがて社会へと伝達され、果ては日本中が感染する。そうやって様々な情報が飛び交い、混ざって拡散していく。こうして文化が形成される。人の遺伝子と同じで、これは文化の遺伝子なのだ。

彼女、神崎零子が持つ黄金の鍵を使えば日本中を、いや 世界中に広がる人々の心を思いのまま、操作する事が出来るのである。

彼女は、その源……精神攻撃兵器とも言えるマインド・ウィルスの発信源なのだ。

* * *

精神感応物質ミスリルというものがある。

それは人の心の力動に反応して、心理的元型を介さずに霊的作用現象を引き起こす媒体である。触れて、願うだけで記録されている内包概念を出力し、事象変移を起こすものだ。

術式を修めずとも、セットされた単一の事象変移なら誰でも使える、水晶のような物質とされている。限りなく透明で、日光の侵入角度によっては虹が映る。

これを核として球状に加工し、外装を与える事で本来不安定なミスリルと使用者との接続子にし、拳銃などの銃火器に近い、多数による代替可能な攻撃兵器としたものが、術式武装である。

お嬢の心臓には、この外装を与えられていない剥き出しのものが使われている可能性が高い。

精神感応物質に代替された人間の心臓 それは人の形をした、精神攻撃型の術式武装ではないのか。

ふざけている。お嬢の体はそんな怪しいものの隠し場所などでは断じてない。彼女は真つ当な人間で、人の羨望を集めながら白鳥のように空へと飛び立つ、強く美しい人間なのだ。神崎財閥は 彼女の祖父は、それを踏みにじっている。

そんな想像をした自分の頭を呪い、思考を追い払う。彼女もまた、誰かに翻弄されている人間なのかも知れない。

すると、傍らから声がした。早乙女イチだ。

「あの、顔が青いよ。大丈夫？ これ、携帯電話……」

両掌に載せているそれを受け取り、感謝の言葉もどこかおざなりに言ってポケットへとしまっ

た。今の通話は聞かれていなかった。その事に安心して、溜息を吐いた。

チャイムが鳴る。昼食は摂りそびれたが、重要な事が判明したので良しとする。早乙女とお嬢には教室に戻るよう促した。

「早く戻ったほうがいい。授業が始まるぞ」

強気な碧眼が俺を見据える。

「私、諦めませんわよ」

気弱な瞳が見つめてくる。

「えっと……また、後で」

そう言い残して二人は校舎の中へと入っていった。

俺の足が動かない。先の情報は足の裏に根を張らせる程の衝撃を与えてくれたのだ。果たしてこの街に潜む危険性に、この今気付いている人がどれだけいるだろうか。

あまりにも 馬鹿げていて。これが一触即発の、それこそ崖っぷちに立たされた平和なのだと理解するのが、突拍子も無く思える。風前の灯。この穏やかな日常は、綱渡りの酷く危ういものだったのだ。

成る程確かにあの理由なら、魔女が執拗に神崎を攻撃する筈である。顛末は恐らくこうであろう。

鍵を渡せ。さもなければ関係者を一人ずつ殺していく。

術式使いに倫理など通用しない。それに囚われる必要が無い。細かい理屈など塵芥に等しく吹き飛ばせる、超人なのだ。

これが神崎や我謝御霊会の間だけで扱われている問題のうちであ

るならまだいい。

だがユニオンやその他特務機関に漏れれば、只では済まないだろう。今のところ均等なバランスで成り立っている平和が、鍵という楔が打ち込まれる事で難なく崩壊する。

人に言えば鼻で笑われるような目的　世界征服でさえ、現実味を帯びてくるのだ。一組織に完全に管理された世界……デイストピアの形成が将来的に可能となる。

鍵を狙い、各機関が送り込んでくる異能者や術式使い同士で小競り合いとなり、やがてそれは組織同士の紛争へと拡大、果てには国を巻き込んだ戦争へと広がっていく。

そうして、第三次世界大戦が起きる。

その引き金が、今、俺達の手に乗ねられた。

何かが破裂する乾いた音。次いで響く地鳴りと崩壊音に、周囲を見渡す。

屋上から見下ろした街の中で、朦々《もうもう》と茶色をした煙が巻き上がっている。

「何だ……!？」

記憶を辿る。あそこには何が建っていた？

そうだ、あそこは人がいない旧市外区。空き物件の建物など幾らでもある、寂々としたゴーストタウン。

森のように林立するコンクリート構造のビル。魔女が人を殺した場所。

「……まさか、爆薬……?　伊庭は、尾行されていた、のか……?」

裏家業である情報屋と待ち合わせるに、最適な、場所。

俺は携帯を取り出す。伊庭へのリダイヤル。繋がらない。コール音に焦りばかりが募っていく。何かが、致命的に、遅過ぎた気さえしてくる。

駆け出した。脇目も振らず。どうか生きていて欲しいという小さ

な希望に縋りつく。

学校から飛び出した俺は、深い森の中へと迷い込んでいく錯覚を覚えた。

俺の中の怪異が囁く。頭を振って、それを追い払った。

それでも、内なる声が止む事は無かった。

怪物と戦うお前は、その過程で自分自身も怪物になる。

深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533x/>

真昼の月が見える場所で

2011年12月12日00時57分発行